

『野火止』発刊にあたり』

野火止サッカー倶楽部会長

昭和40年3月卒 高木 清彦

平素は野火止サッカー倶楽部の活動にご理解とご協力を賜り有難うございます。

慶応義塾志木高等学校サッカー部は同好会時代を含めるとまもなく半世紀になろうかという歴史と約500名の卒業生を抱える大変伝統のある運動部に成長いたしました。

これも偏に、今まで数多くの先生方のお世話になつてきたからこそであります。なかでも渡部真也先生には教員生活のほとんどに亘つてご指導いただいて参りましたが、本年3月末に目出度く定年退官を迎えられることになりました。本当に有難うございました。

そこでOB会として、渡部先生に感謝の気持ちを伝える方法をいろいろと模索しております。また、この機会にサッカー部史のようなものを作れないだろうかという事が話題となり、この度の発刊となりました。

野火止サッカー倶楽部では、メンバーが集まる正月二日の初蹴会、OB会総会時等に皆でサッカーを楽しみ、プレーを通じて年代の異なる会員の交流を促進しております。

しかしながら約半世紀の年代の開きがあると、前後4、5年の間のことはわかるとしても、20

年間、30年間の開きのある年代のその当時の状況は、なかなか伺い知る事が出来ません。

部史のスタイルも千差万別あると思いますが、私たちは各年代の代表の方々にその当時の思い出をエッセー風に執筆していただきました。数字を集めた公式記録的なものはあまり無いと思いますが、その文面を通じて大先輩から若手メンバーまで各年代のサッカー部の実力や活動状況、当時の高校生活、更には渡部先生の志木高サッカー部への指導の軌跡などを感じ取っていただく事が出来ると思います。

お忙しいなか時間を割いていただいた各年代代表の執筆者の皆様、原稿を集めていただいた幹事の皆様、大変有難うございました。

最後になりますが、野火止サッカー倶楽部では活動の中心を物心両面にわたる現役チームへの強化支援に置き、合わせて会員間の親睦も目的に、これからも活動してまいります。そのためには会員各位からの年会費が大変重要な要素となりますので、年会費の自動振替を促進しているところでございます。皆様の更なるご協力を賜りますようお願い申し上げます。

もくじ

「忘れえぬ青春」	昭和37年3月卒	内田 晋	9
「昔・むかし」	昭和38年3月卒	栗田 勝也	13
「サッカー部草創期あれこれ」	昭和38年3月卒	土方 智	17
「渡部先生とサッカー部」	昭和39年3月卒	大林 新治	21
「今思えば青春だったあの頃」	昭和40年3月卒	小川 清久	25
「トベさん」	昭和41年3月卒	大西 恭二	29
「私を培ってくれた渡部さんと志木高サッカー部」	昭和42年3月卒	真壁 修	33
「志木高サッカー部の思い出」	昭和42年3月卒	檜山 温	37
「慶應義塾志木高等学校体育会サッカー部と渡部真也先生」	昭和43年3月卒	柳下 幸一	39
「キャロルの会」	昭和44年3月卒	新田 博利	49
「野火止21」	昭和46年3月卒	折登 泰樹	53
「ドイツ遠征、早慶戦そして県大会決勝戦」	昭和47年3月卒	矢野 一彦	57
「埼玉県大会決勝の思い出」	昭和48年3月卒	田中 羊二	61
「志木高サッカー部は永遠に不滅です」	昭和51年3月卒	梅津 基市	65
「サッカー部回想録」	昭和52年3月卒	有志 二同	69
「昭和50年から52年の志木高サッカー部の思い出」	昭和53年3月卒	阿部 秀樹	75
「我が慶應志木高サッカー部」	昭和54年3月卒	八木 充	79
「志木高サッカー部での7年間」	昭和55年3月卒	飯塚 元一	85
「志木高サッカー部の思い出」	昭和56年3月卒	有志 一同	89
「埼玉県ベスト4の悪がき達」	昭和57年3月卒	石塚 雅之	95

「現役とOB」	昭和58年3月卒	白塚 重典	99
「グランドで過ごした3年間」	昭和59年3月卒	河手 哲雄	103
「40歳にして想う志木高サッカー」	昭和60年3月卒	兼松 公彦	107
「思い出とともに」	昭和61年3月卒	土方 康弘	111
「志木高サッカー部」	昭和63年3月卒	中村 直人	115
「先生に贈る言葉」	平成元年3月卒	有志一同	119
「感謝」	平成2年3月卒	多田 憲一	125
「渡部先生との思い出」	平成3年3月卒	小林 英誠	129
「志木高サッカー部の想い出」	平成4年3月卒	野中 義政	133
「3Bの重要性」	平成5年3月卒	吉野 慶	137
「渡部真也語録」	平成6年3月卒	鈴木 剛史	139
「志木高サッカー部で学んだ事」	平成6年3月卒	大久保 俊行	143
「渡部先生と志木高サッカー部の思い出」	平成8年3月卒	工藤 雄介	145
「私と渡部先生」	平成9年3月卒	金井 茂樹	149
「あきらめない心とチームワーク」	平成10年3月卒	岡田 誠司	155
「渡部先生という存在」	平成11年3月卒	鈴木 豊	159
「サッカーの醍醐味 3人目の動き」	平成11年3月卒	山内 学	163
「サッカーと高校生活」	平成13年3月卒	廣瀬 大輔	167
「充実」	平成13年3月卒	岡野 友亮	171
「私の人生の恩師へ」	平成14年3月卒	情野 誠人	173
「渡部先生へ」	平成14年3月卒	文堂 友寛	175
「3年間の思い出」	平成15年3月卒	新見 孝之	179

『忘れえぬ青春』

昭和37年3月卒
内田 晋



志木高校サッカー部の始まり

サッカー部ができたきっかけは、私たちが1年（昭和34年）の秋に体育の授業でサッカーをしたことからであった。当時サッカーは全国的にはメジャーなスポーツではなく、埼玉県（特に浦和）の高校はサッカーが全国トップレベルであったにも拘らず、それまで我が志木高には同好会もクラブもなかった。

中学時代サッカー部に所属していたり、上記授業でサッカーに興味を持った、或いは自分のサッカー能力を過信（？）した

者達が放課後集まり、最初は単なる球蹴り集団的な同好会として熱心に練習をおこなっていた。

このような活動の中で去る者もあつたが徐々に人数が増え、私たちが2年になって、学校からクラブとして認められるにいたつた。また、大学サッカー部の志木高先輩土方仁さんにコーチとして我々を指導していただいたことにより、(技術レベルは高かつたとはいえないが) やつとサッカーチームとしての体をなしてきた。

しかし、グラウンドがホッケー部と共用であつたため、グラウンド半分を使つて練習することが多く十分満足のいく環境にはなかつた。また、ゲーム形式の練習は、常に出てくる10数人(10人に満たない場合もあつた)ではできないため、他運動部(テニス部等)に所属するサッカー好きに協力してもらい実践的な勘を培つていった(?)。

グラウンドが前述のような状況であつたこともあつて、ゴールポストは常設されていなかった。このため、毎回練習開始前に鉄管3本をネジで繋ぎ、組み立て作り、練習終了後撤去する、今では信じられない作業をしていた。

対外試合

記念すべき公式戦の第一回は対不動岡高戦で、結果は延長ながら2対1で勝利した。但し、これが私たち学年の唯一の貴重な勝ちゲームである。なお、実力が乏しかったこともあつて対外試合をする機会は少なく、2年間で練習試合を含めても10試合に満たなかつた。

私個人の成績

自分自身の思い出は、対浦和商业高戦に30×40メートルのシュートであげたゴールである。今でもゴールポストに吸い込まれるように入ったシーンを思い出することができる。また、練習試合であつたが対立教高戦でも同様のゴールがあり、この2点が私のサッカー部、はたまた高校時代の大事で貴重な財産である。

サッカー以外

サッカー以外の志木高生活における忘れられないことは、もちろん農芸の授業であろう。この時期以外、後にも先にも経験をしたことがない鋤による土起こし、堆肥撒き、麦刈り等の百姓仕事は懐かしい思い出である。また、建部先生が小型ナイフを使って行つた子豚の去勢時における、子豚の悲鳴・切除後の遁（豚）走も印象深いことであつた。また、農芸作業後飲んだ志木高製牛乳の味は忘れがたいものである。

以上記憶をたどり思い出すまま書いてきたが、何といつても四十数年前のことであり忘却の彼方になつたことも多々ある。ただ、志木高サッカー部を立ち上げ同好の仲間と一緒にグラウンドで球を蹴り、駆け回つたことが、青春の良き・楽しい思い出（今も青春の真つ只中に居ると思つてゐるが）の1ページとして残つてゐることは確かである。

ついでに渡部先生

渡部先生は私たちが卒業した後、志木高にいらしたため、残念ながら直接ご指導をいただく機会はなかった。しかし、近年サッカー部OB会等で先生と数回お会いし、ユニークな、かつ闊達なお人柄に触れる機会を得たことは幸いであつた。先生が志木高サッカー部のレベル向上に多大なる貢献をされたことに感謝し、退官後も老い朽ちることなく、志木高だけではなく日本サッカー界発展に益々ご尽力いただくことを、お願いしたい。

最後に志木高サッカー部並びに野火止サッカー倶楽部が今後ますます発展することを期待して止まない。

『昔・むかし』

昭和38年3月卒
栗田勝也

平成十八年三月二日、午後二時頃、「野火止サッカー倶楽部」会長の高木清彦君から突然電話をいただきました。渡部真也先生に関する思い出があれば、一番ふさわしいとは思いますが、私がか卒業した後、赴任された先生の事を書くのは、むづかしく、困ったなと思いましたら、昔の事なら何でも良いですから、一応書いて下さいと云う高木会長のお言葉通り、一応なにか書いてみますが、既に半世紀近く経っている昔のことですから、お名前等に思い違いや間違いがあるかも知れません。

昭和十八年四月一日生まれの私は、一年遅れで志木高校に入学いたしました。内田君や安村君達と同年の入学です。志木高にサッカー部があると聞いて入学したのですが、実際には、サッカー部も同好会ありませんでした。

私に嘘をついたのは、山忠こと山田忠雄さんでした。勿論悪気があったのではなく、単にラッカー部と間違えたためです。当時はサッカー自体がまだまだマイナーなスポーツであった事を考えれば無理もないかも知れません。止むを得ず、昭和三十四年春、当時の同期野間脩平君（以前フジテレビのアナウンサー）にさそわれて、一緒に卓球部に入りました。私は中学で三年間サッカー部でしたが、小学生の時、ずっと卓球をやっていました。その直後、中学・高校・大学を通しての先輩にあたる杵山君にさそわれて、嫌々バレーボールをやっていました。そんな時に、一見不良（実際には良い人）の出原君が現れ、今度サッカーの同好会をつくるから、お前も加われと言われました。良く聞いてみたら、メンバーの誰も、サッカーを知っている人間がいないと云う事でした。十二、三人いた二年生の誰もが、たった一人の一年生であつた私の云う事を良く聞いてくれたのを覚えています。出原君にしても、池沢君にしても、今、考えると、本当に良い先輩達でした。その後下に、土方智君や横溝君（当時大塚君）達、中学で既にサッカーをやっていた人達が入ってきて、ようやくサッカー部になりました。

遅い後輩達だと思っていたら、二年の時私が落第し、卒業は同じになつてしまいました。

大学に進学した私は、大学でも二年生で落第したため、土方・横溝君達の、一年後輩である志村君や大林君と同じ卒業年度になりました。従つて、私の高校・大学の純後輩は、高木会長達が一番上です。その純後輩から、是非にと頼まれ、昔・むかしの遠い記憶をたどりつゝ、訳のわか

らない事を書いておりますが、今でも自信をもって云える事は、良い友達と、良い高校生活を送ったなど云う思い出です。同級生が人一倍多い事もあって、本当に良い青春時代の思い出です。多分皆さんも同じ思いをした経験があると思いますが、半分大人になりかかった大学生になつてからの友達と違つて、高校生の時に知り合つた友達は、一生の友達であると思います。勿論例外的には、大人になつてからや、中年・老年になつてから、良い友達を得た人もいると思いますが、高校時代からの友達に本当の親友が多いのではないかと思います。

多感な高校時代、サッカーを通しては勿論、サッカー以外にも色々な思い出が、ふつとよみ返る事があります。多感であつたために思い出深いと思いますが、むづかしい高校生を長年教えて来られた渡部先生に想いが及ぶ時、本当に永い間、ご苦勞様でしたと云う以外に、私は言葉を知りません。健康な時ばかりでなく病氣をされたり、体調をこわされた時、他人に云えない、つらい時もあつたと思いますが、本当に本当にご苦勞様でした。これからも卒業生大勢のためにも、いつまでも、お元気で、頑張つて下さい。最後に、文中、勝手に名前を使わせていたゞいた諸氏に、もし私の記憶違い等ありましたら、悪しからず。

『サッカー部草創期あれこれ』

昭和38年3月卒

土方 智

渡部先生本当に長い間ご苦勞様でした。

さて、小生宛にサッカー部草創期について何でも良いから書けという嚴命を受け、もう四十五年も前のことなのでつたない記憶をたどりながら拙文をしたためようと思います。

小生が慶応志木高校に入学したのは昭和三十五年のことでした。中学時代からやっていたことから高校でもサッカーをと思い早速サッカー部（サッカー同好会）に入会。当時はグラウンドの半分を使い、円くなってボールを蹴るもしくはシュート練習が主でした。キャプテンは出原さん。あまり大きくない体でしたがファイトは人一倍で、特にヘディングはすばらしいものでした。

二年生になった時、部として認められ、大学からも私の兄がコーチとして送り込まれてきました。その頃ゴールポストはありましたがゴールネットがなく、キャプテンの小石さんの家が漁業

関係かなにかで魚網をもつてきてくれました。これが幅二メートル程度のものでこれを二枚つなぎ合わせゴールネットとしたのですが、素人が作業をしたために奥行きがなく、ゴールに跳び込むとネットに足をとられ、まるで石狩川の鮭のようでした。

この年は記念すべき事がおこりました。公式戦で不動岡高校に勝ったのです。確か一対〇か二対〇。この一勝を記憶しているほどですからいかに弱かったか分かります。

この年の夏休みに柔道場を宿舍にし、確か一週間ほどの合宿をやりました。合宿の内容はさることながら、合宿に陣中見舞が届きました。大学一年になった出原さんです。フルサイズのオーブンカー（外車）に乗り、玉子一〇〇個か二〇〇個（当時の玉子は高かった）を持ってさつそうと現れました。全員感謝したもののその派手さ、迫力に只啞然。

こんなこともありました。立教高校（この年に池袋から志木に移ってきた）との練習試合で慶応は下手なのに気力だけは充実しがチンガチン当る。栗田さんなどは敵のボールではなく足や尻ばかりを狙い、勝った立教が金輪際慶応とはやらないという始末。

若くして亡くなつた尾関先輩のことにも触れなくてはなりません。尾関さんは中学時代は野球の選手でサッカーは初めてでした。しかしながら整ったマスクに似合わず太い足からくりだすシュートは並大抵のものではなく、特に振り向きざまのシュートは強烈でした。

またその性格はひょうきんで、周りの人達をいつも笑いの渦に巻き込んでいました。四〇代の

前半だったでしょうか、朝起きたら既に事切れていたそうです。

サッカー以外の事も思い出しました。私が高校の頃は渡部先生はまだお見えではなく、部長は萩原先生でした。先生はご存知の通りの物理の先生で、小生が出来たのでしょうか、物理は数少ないAのうちの一つでした。

思いつくまま具にもならないことを書いてきましたが、やはり高校のサッカー部は最高の思い出を作るものでした。同期の大塚などは、自分の足が曲がったのは私がサッカー部にさそったからだと先天的ガニ股のくせに言っています。栗田さんも大塚も井上も、西川や三浦も今会えばすぐに五〇年前にもどります。何か一つのことには一生懸命になることは素晴らしいことだと思えますし、今後もこの仲間と老後をエンジョイできたらと考えています。

『渡部先生とサッカー部』

昭和39年3月卒

大林新治

私がサッカーを始めたのは志木高サッカー部に入ってからである。

松井君に誘われ入部したとき、同期では、後のキャプテンの瀬川君とバイスキャプテンの志村君が既に入部していた。

当時のキャプテンはもちろん、土方先輩である。その風貌と、ドスのきいた声は、今まで経験のしたことのない「大人の世界」を感じさせるものであり、憧れでもあった。

当時のサッカー部は人数が11人ぎりぎり、私のような素人もルールを完全には理解しないまま直ぐに試合に出してもらえた。

私の初試合は確か文教高校との練習試合であったと思う。試合に勝ったか、負けたかは残念ながら憶えていないが、栗田先輩がペナルティKを外した事だけは良く憶えている。

他に記憶に残る試合の一つに立教高校との試合がある、確か10点以上点を取られ負けてしまったが、私の記憶に残っているのはそんな事ではなく、相手のペナルティKを井上先輩がとめ、相手からも大きな拍手を浴びたことである。これがスポーツなんだと感動した記憶が鮮明に残っている。

3年になり、先輩たちが去り、瀬川新キャプテンのもと練習が始まったが、サッカーの難しさから壁にぶち当たり、サッカーに対する情熱を失いかけていた。

そんな折の6月、修学旅行に行く事となった。

札幌から網走に向かう夜行列車の中、激しい腹痛と下痢に襲われた。

その後、バスで原生花園やオホーツク海を廻り宿に着くまで必死に我慢したが、我慢しきれず先生に不調を訴えた。

体温も39度近くあり、直ぐに網走厚生病院に行き、診察を受けたが、赤痢の疑いがあるということ、即、隔離病棟に入院となってしまうた。

確か4日ばかり入院し熱も下痢も収まり、赤痢菌も検出されないということで退院の許可がでた。

その間ずっと付き添ってくれたのが新任の渡部先生である。皆に合流すべく、層雲狭の宿に向かう。クラスの仲間は皆、快く迎えてくれたが、先生方は私を病原菌でも見るような目（私の思

い過ぎしかも？」で見、その後の行動を共にすることを許してくれなかった。

翌日、私と渡部先生は札幌に戻り、1泊した後、飛行機で東京に帰ることとなった。

私の修学旅行も散々であったが、付き合わされた先生は、それ以上だったと思う。

入院してからずっと、渡部先生と行動を共にすることとなったが、私がサッカー部である事、壁にぶつかって辞めたい事など話すと、一生懸命サッカーの楽しさ、面白さを話してくれた。

その迫力に押されサッカーを続ける事を、その場で約束させられてしまった。

そればかりでなく、当時部長だった萩原先生の了解が得られ次第、サッカー部の面倒を見ることを宣言してくれた。

それが、渡部先生がサッカー部の面倒を見てくれるきっかけとなったことを皆さんにお知らせしたい。

その後の先生の指導で私も何とか壁を乗り越えサッカーの楽しさを感じることができるようになった。そんな経験をした部員は私だけではないと思う。

私自身、その後のサッカー部や野火止会になにも貢献できなかったが、先生をサッカー部に引張り出すきっかけを作ったことを今でも誇りに思っている。

もちろん、このことが無くても、先生はサッカー部の面倒を遅かれ早かれ見てくれることとなったとは思わが…。

『今思えば青春だったあの頃』

昭和40年3月卒

小川 清久

私は、浦和の片田舎の公立中学から志木高に進学しました。坊主頭のままで入学したので、一見長髪で都会的なスマートさを漂わせる先輩・同級生に戸惑ったものです。しかし言葉を交わしてみれば、お国なまり丸出しの、おらが村・町の神童のなれの果てが沢山居てほっとしたものです。早速サッカー部に入部したのですが、3年生がやたらに大人に見え、また大人の様な「悪い遊び」を自慢げに話すのにビックリさせられました（今考えれば、ちょっと背伸びしてワルぶっていただけですが）。練習は、特に指導者も居らず先輩達の指導で行っていました。3人兄弟の如く、長兄（3年生）が次弟（2年生）に厳しく末弟（1年）に優しい分だけ、次弟の末弟への当たり（指導？）が厳しい様に思われました。

妙に大人に思え我々には優しかった土方先輩たちとの付き合いは9カ月で終わり、2年生が責

任学年になり、外見はややヤクザっぽい瀬川さん、角刈りの土建屋風大林さん、ネズミ男を彷彿させる松井さんや志村・新井・三浦さん達にお世話になりました。しばらくして進級した途端、新任体育教師として渡部先生が部長に就任されました。ちよつと唇を尖らせながら、聴いてもちんぷんかんぷんのサッカー理論を機関銃の様にまくし立てる小さいくせに妙に生気に溢れた若造（我々と先生とは多分5歳違いか？）と、最初の印象は決して良いものではありませんでした。御遊びムードが色濃く残っている旧部員の反発と異なり上野・塩沢・大西・中島・雨宮・中村・久森君達の新生は、素直に先生の指導を受け入れた様です。当然彼らの上達は早く、これが危機感となつて全員が御遊びムードから少しづつ脱却していきました。

私はフルバックで、高木君と共にゴールキーパー野田君の練習に付き合うことも、又下手で居残り練習も多く、浦和の自宅に帰る最終バス（多分6時半位か？）に間に合いません。踏切で停車した浦和方面行きのトラックに頼み込んで、助手席か荷台（当然違反だが警察ものんびりしていた）に乗せてもらつて帰宅していました。当然、帰宅直後は眠くて勉強が出来ず、3時間眠つてから3時間勉強し、また2〜3時間眠ると言う変則的な生活をしていました。

夏合宿も強烈で、当時の柔道場を宿舍として用い、午前と午後各3時間位練習をしました。多分、直ぐ「こんなに練習したら死んじまう」とぼやく我々に、人間の能力・体力はそんなものではない、と先生は教えたかつたのでしょう。秋の定期戦が終わつて、我々が責任学年となり、

渡部先生の叱責をもらうことになります。温厚な高木主将、粘り強い野田、大西両君、飄々とした三浦君、感情の激しい高橋君と同級生は一見バラバラの様ですが、それなりに調和がとれていたと思います。私は主務をしておりましたが、各大会の会議に出ると「KOとはノックアウト高校の意味だ」と皮肉を浴びせられて参りました。確かに当時埼玉県はサッカー王国と言われ各校は強く、公式戦で勝つたのは只の一回だけと記憶しています。

私は多忙な体育会会長を兼ねればしばしば練習をさぼり、しかも仲間より技術が劣っていたので、先生からお小言を大分もらいました。サッカー部員としては当に落第生だったと思います。しかし同級生が良くかばってくれ、マラソン大会の創設、収穫祭の運営など高校時代にしか出来ないことを貪欲にする事が出来ました。このため当時の白石校長に直談判して後にも先にも無いオートバイ通学の許可も勝ち得ましたが、運転中に居眠りをして荒川の土手下に転落したことが二度ほど有ります。全力疾走しているような生活で、体力の限界に近かったのでしょう。

還暦を迎え「俺の人生の中で最も楽しかったのは？」と自問してみれば、ためらい無く高校時代と答えが返ってきます。異性の影に彩られた時こそ有りませんでした、迷わず全力疾走で駆け抜けた高校時代こそ「我が青春時代」だったでしょう。

『トベさん』

昭和41年3月卒

大西 恭二

二〇〇六年春、母校より卒業40周年の行事として志木高卒業式出席の招待を戴いた。

エッ40年も前?? でも渡部先生と最初にお会いしたのは、それよりさらに3年前、一九六三年(昭和38年)の4月、私たちが入学し、また先生が東京教育大より志木高に赴任された年である。体育の先生。色のくろい、目が合うとニヤツと笑われる、温かみのある先生だなという第一印象を持った。何時のときからか、先生には「トベさん」という綽名がついた。

私の故郷は神戸・六甲、年違いの兄、登が志木の高校生活の楽しさを春・夏・冬の帰郷時に自慢する。自然と触れ合いながら寮生活が送れそうだ、なんだか志木高が理想の姿に思え、両親のすねを齧って、志木高を目指すことにした。

埼玉県北足立郡足立町大字志木字二一一九、数え切れないほどの便りを神戸の両親に出したか

ら、当時の住所を覚えてゐる。足立町役場から、拡声器で行事の案内が流れてくる他は、武蔵野ののどかな、冬は寒さが厳しいキャンパスだった。授業には「農芸」が正課として残っていた。

あこがれのサッカー部には事情もあつて、2年生から入部。当時の仲間は塩沢・中村・雨宮・上野・中島・久森（故人）・私の7名。技術に劣る分、一生懸命走り回つたように思う。練習時間ももちろん、学期末の試験中でも寮の前の芝生で、トベさんも交えてサッカーだった。それほど楽しかった。大学に入ると、仲間4名は体育会サッカー部でさらに腕（足？）を磨く道を選んだ。渡部先生が赴任された当時の志木高サッカー部の力量は、ジーコがやつて来た時の住友金属くらいだったのだろうか？ 埼玉県が強豪県であつたことも一因だが、県予選の1―2回戦で、大體は敗退していた。一生懸命プレーするのに結果はついてこなかった。

そのようなチーム力なのに、「早慶サッカー・憧れの国立競技場・全面芝生！」の前座戦に出場出来ることになり、夏休み1ヶ月余の合宿で鍛錬して臨んだ時は、技術も身体も気持ちも「ワンランク・アップ」していたように思うし、あるプレーを褒められたことは40年後の今でも嬉しい思い出、宝物である。

春・夏の合宿は、キャンパス内の柔道場か剣道場に泊り込み、学食でエネルギーを補給するやり方だった。ある日、納豆が出た。東京の納豆は関西では「ほとんど食べない異物」である。当然食べられないので、残す。翌日また納豆が出た。するとトベさんは50粒をよりわけ、「恭二！

これを食え！ 残った粒数だけグラウンドを走るように！」どのようにかきこんだか…おかげで其の時から納豆は異物から好物に変化した。こうした出来事のほか、恐らくはポケットマネーだろう。合宿休憩時にトベ・スペシャルというべき甘くて濃い紅茶（何よりうまかった！）を、いつも準備いただいたり、また小金井キャンパスで工学部サッカー部を指導いただいたり、感謝しきれないご恩をいただいている。

大学研究室では「お前のサッカー熱の1%を研究に注げ！」と恩師にどなられ、その後商社に就職したが後輩に「家庭第一・仕事第二・でもそれよりサッカーが大事」と放言し、呆れられている。

このような変な父親を見てか、4人の子供は皆サッカーが好きでプレーする。長女はトベさんの後輩になって、女子サッカー部員となった。

先日、塾日吉グラウンドの蹴球際に参加させていただいた。出場選手の最年長は何と84才！ 現役選手・各年代のOB諸兄と一緒に汗をかき、その後バーベキューを楽しんだ。みんな、喜々としている。「幸せ」とはこのような一瞬なのだ！ と心の中で叫んだのは私ひとりではあるまい。何才になっても、サッカーは楽しいし、楽しめる。これから先もずっと続けたい。其の時に、トベさんとプレーが出来たら、この上なく幸せに感ずることだろう。

『私を培ってくれた渡部さんと志木高サッカー部』

昭和42年3月卒

眞壁 修

志木高に入学したのは東京オリンピック開催の年でした。

当時の志木には、高翔、有隣の二つの寄宿舎があり、前庭の芝生で、寮の仲間と裸足になりながらサッカーを楽しんでいました。

当時、寄宿舎の舎監が渡部さんでした。渡部さんがサッカー部の監督もされていたことから、お願いをして入部をご許可いただきました。

その時、私は2年生でした。入部の条件は1年生と同じくボール磨きからはじめることでした。今と違い、当時のボールは皮製で、ゴムのチューブにポンプで空気を入れ、チューブを閉じ、皮製のボールの合わせ目の両側の閉じ穴にニードルで皮ひもを通して締め上げるものでした。

練習が終わると、空気を抜き、グリースを塗りこみ、ボールを磨きました。みなで行う、こう

した作業を通じて、会話が生まれ、お互いを理解し、連帯感が培われたように思います。

当時のキャプテンは塩沢さん、上級生に中村、中島、上野、大西さんと錚々たるメンバーでした。同期は宮本（翌年キャプテン・故人）、檜山、森、西川、大島、そして真壁の6人でした。私はバックスでした。グラウンドでは上下関係は一切なしでした。上級生の指導も適切で、サッカーの基礎からフェアープレー、チームプレーのあり方を学ぶ事ができました。

渡部さんは当時、志木赴任間もなく、心身気鋭、エネルギー満ちでした。練習も実地に指導いただきました。渡部さんのキープ力は抜群で、ボールをどうしても奪えないという状態でした。今思うと大人と小学1年生でした。

また渡部さんはゴールのクロスバーに20本当てると宣言されては、全部あててしまうという具合でした。

指導もクラマーコーチの薫陶を直にうけられたこともあり、合理的で、科学的な指導でした。練習や試合の合間には、水をがぶ飲みするというのではなく、温かいお茶や紅茶でした。適度に疲れを取り、体を冷やさず、過度の水分摂取を避けるという配慮だったと思います。

私自身、普段冷たいものはあまり飲まず、火を通した温かいものを飲む習慣になりました。部員の筋肉痛や疲労回復など、健康維持にも、留意され、実質トレーナーもされていました。テーパーリングの使い方、整体などの指導も受けました。

こうした仲間と懐かしい日々をともにし、楽しめたことは本当に良い思い出です。志木高での、学生、寮生活を通じてサッカーという素晴らしい世界を教えていただいた諸先輩に感謝しています。とりわけサッカーが知的で活き活きし、心底より自身も周りも魅了して止まないスポーツであることを教えていただいた渡部さん、サッカーの基本を徹底して叩き込んでいただいた渡部さんのご指導あつての今日と思っています。

「ボールがラインから出そうになつても決してあきらめるな」ということを忘れません。浦和での試合で、ラインを割ろうとしたボールを追いかけて、ライン上でマイボールにしたとき、誉められたことも良い思い出です。

こうした教えがその後の生活、仕事に大きく影響しているように思います。最近KBFを通じて昔の仲間と一緒にボールを蹴る楽しが増えました。これも志木のサッカーのおかげです。



『志木高サッカー部の思い出』

昭和42年3月卒

檜山 温

私の入学した昭和39年はサッカーはまだマイナーなスポーツでした。都内の中学校でクラブ活動として登録されていたのは、文京区でも一校でした。

埼玉県は浦和高校を中心として全国でも有数のサッカーの盛んな地域でありレベルの差はいかんともしがたい時代でした。学校内のスポーツに対する雰囲気は、体育の先生がすべて東京教育大学出身で各運動部とも生き生きと活動していました。

その中であって我がサッカー部は新進気鋭の渡部さんが着

任してわずかということもあり各学年の人数は少なかったですが、新しい時代をつくろうという
気概があったと思います。

当時の渡部さんは、寮の舎監をされており練習に遅くまで指導いただき常にいわれたのは「パスしたら走る」「とられたら追いかける」「丁寧なパス」でした。責任感と思いやりを持ってサッカーをしなさいということだと思っています。

部の目標としては、埼玉県の公式戦に勝利すること、慶応高校に対するライバル心があったと思います。普通高校になつてからの歴史が浅いことと、各種運動競技において対抗戦で敗戦する、農業の授業があった、など慶応高校には一目おかなくてはならない状況でした。

早慶サッカーの前座試合に単独チームとして出場する事が目標の通過点となることになりました。私が2年生のときに、実現して目標を達成する事ができました。

当時の慶応高校の選手とは大学で一緒に、お互い切磋琢磨したことで仲良くなり現在でも機会があれば会っております。

思い出として、私の同期でありました「宮本泰生」君との出会いもありました。マイナーなスポーツであったサッカーをお互いに中学時代からやっていた結果、早い段階から試合に出させていただき3年間の間に数々の思い出に残る試合を経験させていただきました。お互いに大学・会社生活も一緒でしたが一九九一年に急逝され今回の思い出を語り合えないのが残念です。

『慶應義塾志木高等学校体育会サッカー部と渡部真也先生』

昭和43年3月卒

柳下幸一

私は1年生後半期に入部した「途中入社組」なので「サッカー部」には実質二・五年間以下の在籍だった。現役引退間近かの3年生には、塩沢主将以下、中島、中村、雨宮氏と云った錚々たるキラ星が揃っており、新人の私にとっては練習時間外であろうと滅多には口も利けぬ雰囲気があった。

同期の仲間は、多和裕人・山中芳・田中信行（ノブ）・後藤（ゴリ）・高橋・小島（コッチョ）・中村憲保（ケンポ）・石井の都合8人。

「中途入社組」であるがゆえに、多和や山中等の経験者に較べ特に技術面で大きなハンデを負っていただけでなく、何時再発するか分からぬ膝の怪我也も抱えていた実情に常にコンプレックスを感じており、よって凡そ大学の体育会で一軍選手になれるとは思えなかったしその自信も無

かったが、一方で時間を経るに従い益々サッカーの魅力（何しろ『上手になりたい』）に捕り付かれてゆく自分の気持を納得させる策として、妥協の産物ではあったが学部進学と同時に（在学中は恐れ多く会話も遠慮勝ちだった2年先輩組にあつて、珍しく我々の代にも親しく声を掛けて下さった雨宮真一氏が在籍しておられた事情もあり、今度は全く迷うこと無く）「慶應キッカーズへの入部」を決した。

「慶應キッカーズ入部」に際しては、志木校サッカー入部時の其とは大きく事情が異なり、1年生ながら「経験者でソコソコの技術も経験も有する塾内進学者」であつたため、入部初年度チームのBKラインに人材が不足していた固有の台所事情と、当代執行部の運営方針、即ち「年次の如何に拘らず技量と精神力に優れた選手を一軍に抜擢する」にも恵まれ、さしたる試練やシゴキにも遭うこと無く、いきなりスタメンに登用され、入部直後から早々に練習試合に出場することとなつた。

この時、同じく高校時代からの経験者として私と「1年生CBコンビ」を組むこととなつたのが、以来現在まで親交を保つ親友の一人、藤田一憲君（当時は泰生、よつて仲間内の呼び名は『ヤスオ』）であつた。各位も恐らくはご承知のことと思うが、彼は実業界は許より、特にサッカー界ではつとに有名な男で、選手としては失礼ながら「私と同程度」で「キッカーズでのキャプテン止り」だったが、大学卒業後も母成蹊高校の監督を続け、更には自社が経営母体だった「フジ

タ（後のJ-League創設時以降は『湘南ベルマーレ』）のオーナー」として、栄えある天皇杯を手中に納めた実績も有する。

J-Leagueオーナー連仲間では知らぬ人は無いほど有名だったそうだが、彼のサッカーに架ける情熱や知識、見識は、現場から遠く離れた今もなお遍く専門家の其を凌駕しており、並居る自称サッカージャーナリストの如きは凡そ足元にも及ばぬ質・量両面の豊富さを誇っているのです、話をすればするほど、何時、何処からそんな情報を収集したのか？ と、彼固有の記憶力の良さと学習意欲の凄まじさに唯々驚かされるのである。

「失われた10年」に象徴されるバブル経済崩壊以後の経済・社会の激変は、高度成長経済の恩恵しか知らずに育ち且つ斯くも将来展望の困難な時代に運悪く丁度社会の中核を担う立場に立たされた我々団塊の世代に対しても程度の差こそあれ例外無く大変な試練を与え、激震の影響はいま尚続いている。斯く申す私自身も一時は窓際族に追いやられ、人間の最も醜い一面を心底見せつけられたし、名門出身で才気煥発な彼もまた、今は苦難の道を歩んでいるのだが、『人間万事塞翁が馬』である。非才非力な私としては、自分自身と僅かに家族或いは自社の出来事を処すだけで精一杯で、他人の処世まで心配する余裕や能力など毛頭持ち併せないのだが、自らのさやかな体験と彼の類稀な能力からして、私としては密かに彼の人生第二章の幕開けを期待し楽しみにもしている。

そんな男と1年生入部直後から組んだBKラインが、互いを意思を尊重しつつ互助精神に徹し機能することは稀で、試合中は常に（今風のコーチングと云う耳触りの良い表現とは大いに異なる）お互いが決して云い負けぬよう「文句の云い通し」だった。が、この体験も今になって考えれば、「常に自分の意思を外部に言葉や態度で発し続けねば、頭や心で思っているだけでは伝わらぬ」を学んだ貴重な経験だったと思うし、この Group Dynamics の要諦を、以後、自身が社長と云う会社組織のトップに立った時、元来が控え目で自己主張が得意な私としては「人の集団を纏めて行く上で自らの考えを積極的且つ鮮明に表明することが如何に難しく、が然し重要か」を改めて痛感している。

近年、我が代表チームがWC出場レベルに到達するまでに成長し、一昔前のオフト代表監督の「アイコンタクト」や、中田英がマスコミのインタビュに答え「コミュニケーションが足りない……」等と答える姿を見る度に、今更ながら人間集団の縮図としてのサッカーと云うスポーツの奥深さを思い、次いで『フットボールこそ人生』の名言を想起するのである。

慶應キッカーズでは、上述した理論完璧・知識満載、「歩くサッカー事典」とも称すべき藤田君の他にも、国体栃木県選抜チームのインナーを務めた同期一のテクニシャン中島理君や、見かけは誠に地味だが基礎技術面では中島君に勝るとも劣らぬ独協卒のリンクマンのモデル青木正晴君等の、とにかくサッカーが上手くなりたい一心だった当時の私にとって、目標であり同時にラ

イバルでもあった仲間達との間に良い競争関係が存在した結果、自身のサッカー技量も知見も大きく向上したと思う。また同じ志木校サッカー部同期の田中ノブサンと中村ケンポ（先述）、更には変り種の極み、志木校ではバレー部に在籍しながら、寮生だったことや弟の隼人君がサッカー部に属した関係から渡部先生との泥沼関係に陥り、大学進学と同時にキッカーズで初めてサッカーを体験して以来、此方も足が洗えず、加えて生来の厚かましきから今ではキッカーズの代表幹事とも見紛う奥村一人君（因みに同君のあだ名は、蔵前中学から志木校入学時の髪型をそのまま模し『ボウズ』、キッカーズ入部がスタートとは凡そ思えぬほど急速に上達した固有のプレースタイルは、性格同様（？）シツコク粘り強い守備が売り物だったので『キッカーズのベルティ・フォクツ』と呼ばれていた）、加えて一年後輩の野口賢一君、二年後輩の若山君等「即戦力選手」が毎年連続して入部したため、当時の「慶應キッカーズ」は内外から「志木閥」と揶揄されるまでの勢力が主流派を構成していた。

技量の向上云々は優れて自身の主観的な判断だが、恐らく其とは違う観点からした大学時代の私のサッカーに関する最も大きな変化は、高校時代とキッカーズ1年当時は「最終BKラインでひたすら専守専守防衛に徹するだけ」だったポジションやプレースタイルから、3年次には中盤、それも「結構点の取れるHB（LM）」として攻撃面も担当するようになったこと」で、この変身は、周囲の誰よりも先ず、守備的（受動的）な性格を半ば諦め且つ嘆いてもいた自分自身が一番驚い

たことだった。やはり人間は成長し変化するものだ…？

この「攻撃感覚」に関係する余談だが、J League 発足に伴い、地元「名古屋グランパス8」に小社も貧者の一灯を点して来たにも拘らず、過去10年間、チーム成績は殆ど落胆の連続だったのだが、プレイヤーとしてのストイコビッチを除けば唯一アーセン・ベンゲルだけが記憶に残る名監督であり魅力的なチームを創り興奮するゲームを展開してくれた。流石に稀有の名監督と評されるだけあって、彼は監督就任後僅か2年目にして「天皇杯」を獲得するチームを作り上げたのだったが、以前その辺りの舞台裏を当時球団代表を務めておられた（名古屋グランパス8）西垣成美常務（現⑭豊田スタジアム副社長）に伺った処、「イヤー私も苦労しましたヨ、ベンゲルの戦術は超攻撃的で、3点獲られたら4点獲りにゆけ！と迷わず指示するんだから…」の談。成る程、人生も守勢一辺倒では獲り得る果実もミスミス見逃すと云うことか、の思いを改めて強くしたことだった。

では、40年間もの歳月に亘りこれ程までに私達を熱中させ続けるサッカーの魅力とは一体何なのだろう？ 勿論、甚だ抽象的な表現を用いれば「個人競技に対する集団競技」としての魅力はあるが、それ以上に決定的な要因は（福沢先生の教えに繋げては話としては余りに出来過ぎだが）、詰まるところ私にとってはやはり「独立自尊の精神を体現するスポーツ」だからである。

この性癖は発明家として一時代を画した親父の血筋を多分に受け継いでいるからなのだろう

が、私は小心者の割には「考えもせず人の真似をしたり他人から云われた通りに行動したり群れること」が大嫌いだ。だから、如何に名監督に育てられた有望選手であろうとも一旦グラウンドに出てゲームが始まってしまえば、『総てを「自身の判断、裁量、リスク、そして仲間を信頼した上で集団（チーム）の約束と責任分担（即ち、今風の言葉で表現すれば個人の裁量“Own Risk”」で眼前の現実に対処せねばならないスポーツ、サッカー』が、少し大袈裟だが『全人格的に人を（大人に）育て上げるサッカー』が大好きだし、心底信奉しているのである。

教育者たり得るか否かは甚だ疑問だが、社長職は企業組織に於いては紛れも無く指導者でなければならぬが故に、「人を育てる」と云う優れて人間的な行為と責任を遂行する上でサッカーと云う集団競技の果たす役割や効用は極めて大きく重いものがあると確信する。

志木校入学で始まったサッカーとの関係が一体私の人生に何をもたらしたか？と問われれば、瞬時に「一生を通じ、損得・利害を一切無視し、更には家族も一緒に語り合い付き合える人生の友を何人も得られたこと」と答えられる幸せは言葉には尽くし難いものがある。また、云わば触媒としてのサッカーを介して渡部先生から授かった多くの教え、例えば「目の覚めるようなクリンシュートもゴロゴロ・ボテボテシュートもゴールに入れば1点は1点」、「一度やると決したゲームには絶対に負けてはならぬ」、「ゲームを支配するためには、マークマンとの最初の1対1でファウル覚悟でも絶対に勝つこと」等々の現実主義に染め抜かれた教訓は、社会人

となつてからの私の人生の局面、局面で、常に判断の基準となり行動の指針、規範となつた。

斯様に影響力絶大だった渡部先生（仲間内での先生の呼び名は『トベサン』）の本職が「体育教師」だと云う事実を、当時は（今も？）かなりの「気分屋」だったので、その日の天気具合を的確に把握した上で話をせねば反動が恐ろしかった事や、「難しい（暗示に富んだ）冗談」が多かった先生固有の特異な言動から、時として近寄り難く一寸話し掛け難い存在であつたことは事実だが、その反面、合宿時は勿論のこと、殆ど一年中休み無く続く練習時には毎日、我々「子供達」と一緒に汗水を垂らしてプレーして下さった日々の接触（とりわけ近年に頻発する、特に児童教育現場での問題の多くが、生徒と共に生活し、価値観を共有する姿勢や態度（是こそが人を育てる教育者にとつての原点だと私は思うのだが）を欠く教師が多くなつてしまつた一点に在ると考えるが故に）から、少なくとも志木校在学中に意識した事は稀で、云わば「一寸歳の離れた気難くヤンチャな兄貴」にも似た存在だったが、例えば「志木校欧州遠征時」にホテルの部屋中に洗濯物を散らかしつ放しにした生徒を怒鳴り挙げつつ即座に整理させたり、確かバンコクのホテルだったと記憶しているが集合時間に遅れた数名にお得意の鉄拳を揮い、団体行動時に集団の約束事を守る事の大切さを自ら垂範された事や、（必要ならばファウル覚悟で闘えと教えながら、片や確か塾内練習試合を志木校グラウンドで行つた際だったが、キッカーズが対戦相手の工学部にてPKを与えてしまつたので、BKだった私が腹立ち紛れにキッカーが蹴る直前にボールめ

かけて石を投げつけた処へ、審判をしておられた先生から、試合中にも拘らず即座に「そんな卑劣な真似をしてまでオマエは勝ちたいのか!」とこつ酷く叱られたり、にも拘らずご自分は練習試合中に指示が守れぬ生徒めがけて突然何処から石を投げつけてみたり、かと思えば、当時は留年必至の劣等生だった越川君や「ゼロ戦隼人」をご自宅に引き取り、年末年始の休みも返上して卒業まで彼等面倒を觀られたり、J-League開幕の際には珍しく名古屋の拙宅にまで足を延ばされ、先生のお供をして「名古屋グランパス8」の地元開幕ゲームを「無料」で觀戦した等々、幾多の思い出深い体験を積み重ねた結果、卒業後も暫くしてからだが、先生が一寸個性的に過ぎる部分はあると、生来の教育者だと認識し直し次第に尊敬もするようになったのであった。

縷々述べた通り、こうして志木校入学を契機として以後形成され或いは構築することが出来た多くの友人、知人との濃密な関係も、最後まで決して諦めず、然しルールは厳然と守りながら何処までも敢闘精神を貫き通す処世術や価値觀等、私固有の無形の精神的財産も、総てが親父の教育（志木校への進路指導や国際性体得のための機会提供等）、そして渡部先生との出会いから生まれたものであり其処が原点である。

私の人生が、今後も順調に推移したとしても残り³1/3ほどを残すだけとなった今、人間の宿命からして不可能な願いであるとは云え、両親は許より、奥村ボウズ、藤田ヤスオ、青木、中島、田中、吉永、雨宮先輩等々の、サッカーを介し交誼を重ね親交を深めることで自身の度量や人生觀に多

大なる影響を与えて貰った諸氏、諸兄、なかならず渡部真也先生が、今般の志木校へ退職以降も末永くご健康に恵まれた充実した人生後半を送られることを心からお祈り申し上げる次第である。

『キャロルの会』

昭和44年3月卒
新田博利

私は今、浦和レッズの前線として未だにサッカーに関わっておりますが、その原点となつたのは高校時代ではないかと思っております。

我々の志木高時代は現在の校舎・グラウンドではなく、昔は馬小屋として使われていたという教室で授業を受け、そのすぐ前にある狭いグラウンドでボールを蹴っていました。当時はまだサッカーもそんなに盛んではなく、同期に入部した15人のうち中学時代にサッカーを経験していた者は4人だけで殆どが高校からサッカーを始めたメンバーでした。埼玉県大会も参加校は54校と多くはなかったのですが、“埼玉を制する者は全国を制す”と言われた時代でした。

その頃の渡部先生は大学を卒業したばかりでバリバリの熱血指導者でした。特に冬の練習で陽が落ちて暗くなると、まず、ボールにライン引き用に用意された石灰をかけて、ボールを少しで

も見えるようにしたり、ご自分が乗っていたマツダ「キャロル」をゴールの後ろに持つてきて、そのヘッドライトの明かりでシュート練習をしたりしてた思い出があります。その思い出が強烈な為、今でも年に一度集まっているサッカー部の同期会の名前を「キャロルの会」と命名しました。その会で今でも集まると話題になるのが次の二つです。

一、インターハイ埼玉県大会決勝進出

高校3年（一九六八年）の六月、前期中間試験の真つ最中、県予選の準決勝・決勝を戦い決勝では後に漫画「赤き血のイレブン」の主人公として取り上げられた永井良和君（1年）擁する浦和南高に延長戦の末、敗れてしまった事。後半途中まで2―1で勝っていたのに、終了間際に追いつかれ延長では力尽き、志木高初の全国大会出場はなりませんでした。

二、ドイツ遠征（一九六七年七月）

一九六六年のイングランドで行われたワールドカップを視察に行かれた渡部先生がドイツサッカー協会の方と話しをされる機会があり、その際の話を要約すると「ウチのチームを来年連れて来る」「OK」という事で翌一九六七年に実現されました。当時はまだ海外旅行も今程一般的ではなく、殆どの参加者が「飛行機に乗るのも初めて」という状況での遠征でした。一週間北ドイツで合宿をしました。現地では有料国際試合が2試合セットされていて、ポスターは用意されているわ、お客さんは結構入っているわの中でボロ負けした記憶が鮮明に残っております。しか

し、その時見学したデュイスブルグのスポーツシュレを始めとするサッカー環境の素晴らしさは大変な驚きでした。後に日本代表選手として、同じ場所を訪れた川淵キャプテンが将来日本でもこのような環境を作りたいと思われたのがJリーグ発足のキッカケになったと聞いております。

この二つが大きな思い出として残っておりますが、その他にもここに書ききれないほど、ホントにたくさん思い出を得ることができた高校生活でした。

さて、私は今浦和レッズで浦和レッズレディースというJリーグに所属するチームの部長を兼務しておりますが、何と今年からその監督にあの「永井良和氏」が就任いたしました。彼とは練習の合間について、昔話で盛り上がっちゃいますが、そんな私達を、選手は「何のこっちゃ？」という冷ややかな目でみているようです。

また、二〇〇六年一月に浦和レッズはドイツの「バイエルンミュンヘン」というチームと業務提携を結びましたが、その内容を充実したものにすゝる為、その担当者の一人として、今年からドイツを訪れる機会が増えるものと思われまゝす。

渡部先生が退官されるその年に私にとって思い出深い出来事に関連する仕事に携わっているというのも「何かの縁」なのかもしれません。あるいは渡部先生から「お前にはいろいろ教えてやつ

たのだから、サッカーの楽しさ、素晴らしさ等をこれからはお前もしつかりと次の世代の人たちに伝えて行け！ ”というメッセージをいただいているのかもしれませんが。先生と出会って40年、卒業してからも自分自身の人生の節目節目で先生にアドバイスをいただきながら現在に至っており感謝の念に堪えません。キャロルの会は、毎回、全員（14人）とはまいりませんが、年に一度会合を持っておりますので今後ともご参加いただきますようお願い申し上げますとともに、ご健康に留意され、ますますご活躍されます事をご祈念申し上げます。



第29回関東学生サッカー大会 慶応義塾大学サッカー部

『野火止21』

昭和46年3月卒
折登泰樹

投稿にあたり最初に、渡部先生が本年3月にめでたく定年退官されとのこと、誠におめでとうございます。また永年に亘りご指導賜りましてありがとうございます。同期を代表しまして、厚く御礼申し上げます。

慶応志木高校在学中の3年間は、人生の中で思い出に残る出来事がありました。

高校1年でサッカー部に入学して、新田主将率いる慶応志木高校で最強のチームに合流できたことは幸運でした。そこでの練習は毎日厳しく、夜暗くなるまでボールを蹴って、練習後は

ボール磨きの毎日でした。特に夏合宿は、当時は剣道場で寝泊りしていて、真夏が一番暑い午前午後の練習の合間に、1年生は志木のトラックを「3周3分? 持久走」で走り続けました。当時マネージャーだった3年の酒井さんは、グラウンドでサンオイルを塗りながら我々が走っているのを楽しそうに監視されてました。新田さん達の代は、慶応志木高校始まって以来の県大会決勝まで進出し、相手は強豪浦和南高校で、「赤き血のイレブン」の主人公永井選手が1年生で出場していました。両校点の取り合いで、試合は延長の末永井選手の活躍で敗れましたが、とても手に汗握る好ゲームでした。終わったあとベンチの掃除をしながら涙が床にぽたぽた落ちたことを、今でも鮮明に思い出します。

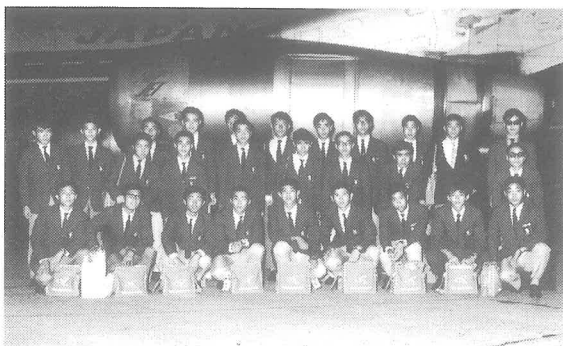
慶早戦の高校戦は毎年のように塾高との試合を勝ち抜き、国立競技場に駒を進めていました。我々が2年のときも若山主将（故人）率いる慶応志木高校サッカー部が、塾高との試合を勝ち抜き早稲田高等学院と対戦しました。そのときの印象は、勝ち負けよりも国立競技場のコーナーは志木高校のコーナーより短く、コーナーキックで大きく蹴りすぎてしまった記憶があります。我々が3年のときは、塾高との雨中の決定戦で引き分けてしまい、単独チームでの出場ができなくなり混成チームで出場したことは、唯一悔いの残る試合でした。

我々が2年のときに、第2次ドイツ遠征があり、我々2年生主体のチームで出発しました。私にとっては初めての海外旅行でしたので、見るもの全てが新鮮に写り、感動の連続でした。西ド

イツキールの郊外のバッドゼーゲベルグの地元の高校や州選抜との試合があり、高校生とはいえ大きなドイツ人のタックルを食らって何度も吹っ飛ばされた記憶があります。試合結果は言うに及ばず惨敗でしたが、当時芝のグラウンドが何面もあり、クラブハウス等素晴らしい施設には驚嘆しました。川淵キャプテンのＪリーグ構想は、ドイツのクラブチームを視察して大きな影響を受けたことは広く知られているところです。

我々の代は、１年次から増大付属の山中君や学芸大付属の中村君等サッカー経験者が多く、期待されていたとも聞いていました。ドイツ遠征も、その期待の表れだと思っています。しかし新人戦・国体・インターハイでの戦績は期待通りの結果をだせなかったように思います。新田さん達の代の凄みを真近で見ていたので、我々もそれに続こうとしましたが、今ひとつ力及ばずでした。ただ１年下の中井君達の代の活躍は、見事なものでした。

我々の代を総括すると、チームワークは良かったと思いますが、やはりリーダーシップが取れる人材がいなかったことに尽きると思います。チームというのは、仲良しクラブじゃダメなのですね。ただこのような経験が、社会に出てからも「個々の力の融合と組織プレーの重要性」を重視しながら、仕事の上で多いに役立っています。これらの貴重な経験をさせていただいた「慶応志木高校サッカー部」と「渡部先生」に改めて感謝の意を捧げたいと思います。本当にありがとうございます。



『ドイツ遠征、早慶戦そして県大会決勝戦』

昭和47年3月卒

矢野 一彦

第2回海外遠征があつたためか同期入部は16名と賑やかで、そのうち約半数が当時の西ドイツ、キール郊外バッドゼーゲベルグで1週間の夏合宿に参加しました。モーターマーチンに宿泊しOBの奥村、柳下氏と塾高から澤、藤田両君を加えた2年生を中心とする総勢27人の志木高チームで地元スポルトシュレーの高校チームと対戦しましたが大差で敗れました。遠征組がこの後約1週間欧州観光しながら、当時まだ日本未入荷のadidasのサッカーグッズやラコステのポロシャツといった希少なブランド物をお土産に優雅に帰還したのに対し、

残留組は志木の埃まみれのグラウンドで若山主将、後藤副将以下居残り3年生の指導のもと地味な基礎練習に明け暮れて大変な思いをしたようでした。

翌年5月の早慶戦が終わると、当時は早々と3年生が引退し、我々2年と1年を交えた新チームが結成されました。同期はサッカー経験者がほぼゼロでしたが、1年生に中学時代からの経験者がいて、この頃からシステムも従来のWMからスイーパーを配した4-2-4へと変更され、この布陣で翌年以降を戦うこととなりました。国立競技場の晴れ舞台で行われる早慶戦は従来より3年生の引退試合であつたため、第22回の公式プログラムには、ご祝儀で試合に出ない3年生も全員先発メンバーとして登録しました。この年は前半志木対早実、後半日吉対学院の変則マッチで、前半の久保のゴールでトータル1対0と勝利しました。ここで森、西本、品田、奥村などは例年どおり引退となりましたが、この年は特記すべきことに主将中井、副将久保、主務矢野、G K宮本、B K小沢、佐藤、梅戸のメンバーが残留して、後の埼玉県大会決勝へと繋がる礎ともなつた歴史的な夏合宿が行われることとなりました。この年は横田芳治OB参加の合宿のあと初日サーキットトレーニング、2日目からボールを使った基礎練習、コンビネーション、試合形式練習と続き5日目に対外試合、6日目休みといった5勤1休のローテーションを夏休み中丸1ヶ月間繰り返すといった、これまでになくハードなもので、この練習試合最初の相手が浦和西高だったのでした。結果は1対8の惨敗でしたが、このことが後の記念すべき決勝進出に続くとは誰も

夢にも思いませんでした。

県大会決勝戦までの道のりは以下の通りです。当初我がチームはトーナメントの選抜チームから漏れていましたが、国体候補選手をだしたチームは出場権ありとの規定に気づきG K宮本がこれに該当するとして連盟に追加出場を要請しました。この時のトーナメントのシードチームが西高であり、同校の対戦承諾の元に追加出場が承認されたわけです。袖口と胴が紺、袖が赤のまったく新しい慶応カラーのユニフォームのもと、厳しい夏合宿から磨いてきたボールを大切にしながらパスサッカーで、カウンター攻撃を特徴とする当時としてはかなり新しいスタイルでトーナメントに臨むこととなりました。1回戦、対西高の結果は後半現ガンバ大阪監督の1年生FW西野朗選手投入も虚しく3対2と逆転勝ち。まさか数ヶ月前に大勝したチームに逆転負けするとは思わず、さぞ悔しかったことでしょう。その後川口工に2対0、準決勝では高校3冠に輝いた浦和南に1対0と競り勝って、ついに志木高史上3年ぶり2度目の決勝戦へと快進撃を続けることとなりました。

12月4日の決勝戦の相手は初代横浜マリノス監督のFW清水秀彦選手を擁する浦和市立高で、大宮サッカー場の芝生のグラウンドにて行われTVの実況放送もはまりました。志木高では授業を中止して皆でテレビ観戦をしたそうです。先発メンバーはG K宮本、DF小澤、田中、矢島、杉田MF中井、中田FW久保、逢沢、吉岡、鯉田の布陣で決戦のホイッスルがふかれました。試合

経過は前半早々に自殺点で1点を失った後、粘り強い守備とGKのスーパーセーブ連発で相手の攻撃を凌ぎ、後半20分ついに得意の速攻で右から中井のクロスを中央で吉岡が頭で合わせた同点弾を市立ゴールに突き刺し、ゲームを振り出しへともどしました。試合は延長戦へと突入しましたが、当時志木高は前後期の2期制で、12月初めに行われた決勝戦は試験の直後。試験疲れで足がつる者、連戦での故障が悪化した者などが続出し、健闘むなしく決勝点をもぎとられ、1対2と惜敗したのでした。試合後のロッカールームで流した皆の涙は忘れられませんが、本当に純粹に一生懸命打ち込んだ賜物と、今では懐かしく思い出されます。

当時は若く、伝統ある志木高サッカー部の一つの黄金時代に、力強く我々を導いてくださった渡部先生がご退職されるのは本当に寂しい限りですが同期一同の感謝を込めて思い出を記させて戴きました。

『埼玉県大会決勝の思い出』

昭和48年3月卒

田中 羊二

昭和47年度生（23期）の年代としてのハイライトはなんと言っても埼玉県の冬の大会で決勝へ進出したことです。この年のチームは一つ上で昨年まで大学体育会サッカー部の監督をしていた中井さんをキャプテンとして、高速ドリブラーの久保さん、大型キーパーの宮本さん、小沢さんらが中心となっていたチームです。そこに私たちの年代から、矢島君、国会で今でもサッカーを続ける逢沢君、杉田くんなどがいて、一つ下に中田君、吉岡くんなどがいました。

このチームは、夏ごろまではまだチームとして出来上がっておらず、特に浦和西高と練習試合をして7点差もつけられるなど大敗していました。その練習試合から、渡部先生が次の点を強調して、チーム作りをしました。

パワーや個人の力では埼玉の上部のチームにかなわないから、仲間の力を借りて戦えというこ

とでした。つまり、パスをつなぐチーム、そして、カバーをしあいながら守るディフェンスがチームの戦術でした。

大会出場に関して、出場校のリストに洩れるなどのハプニングもありましたが、急遽シード校のところにに入れてもらえました。なんとそのシード校とは夏の練習試合で大差負けした浦和西高でした。当時は、現在ガンバ大阪の監督をしている西野さんが中心選手として活躍しており、これは1回戦負けかと思っていました。ただ、渡部先生は持ち前の負けん気の強さで、相手の力、戦術はわかつている、おれの言うとおりにやれば勝てるとみんなにいつて聞かせていました。

この浦和西高との試合は、高校時代で一番すばらしい試合となりました。まず、最初に相手に一点決められ、こちらが追いつき、またさらに決められ、追いつくという展開から、こちらが勝ち越し点を決めてそのまま終了という展開でした。ゲームは大接戦で、最後の最後まで何本も危ないシュートを打たれ、終了のホイッスルを聞いたときには、大殊勲の3対2の勝利でした。みんなうれしさいっぱいの喜びようでした。

その後、川口工業と浦和南高を破り、決勝まで進みました。決勝の相手は浦和市立高、場所は大宮サッカー場、すばらしい芝の競技場での試合、またテレビの中継まで入ったの大舞台でした。ところが、試合の方はなんと開始一分もしないところで、オウンゴールという幕開けでした。そこでリズムをくずした私たちのチームは今までの勢いを忘れ、ただひたすら相手の攻撃に耐える

試合展開となっていました。相手に攻め入ったのは、前半の一回と後半の一回のみ。しかし、その後半の一回で一矢報いたのです。しかし延長に入り一点決められてしまい、力尽きてしまいました。結果は1対2の延長戦負けでした。ダークホースとして、よくあそこまでやれたと思います。この浦和市立高には、マリノスや仙台の監督をした清水さんがセンターフォワードとして活躍していました。

この日はまだもう一つのストーリーが試合の後にありました。試合が終了してすぐに私たち数名は志木高へ戻り、化学の追試を受けたのでした。追試が終わると化学の高木先生が私たちを呼んで、「決勝を戦った君たちにはつらい追試だったと思うが、サッカーも大事だが、勉強も大事だ。両立してがんばってくれ。」との言葉をかけてくださいました。試合が終わって息つく暇もなく学校へ戻り、追試を終えた後の言葉だったので、何か胸に迫るものがこみ上げてきました。私たちは下を向いて話を聞いていましたが、気が付くと化学の教室の床には涙がこぼれ落ちていたのを覚えています。その日は決勝の期待が膨らむ朝から、高木先生の言葉をいただくまで、青春の大きな一ページをめくる日となりました。

『志木高サッカー部は永遠に不滅です』

昭和51年3月卒

梅津基市

渡部先生が教師の職を退任される、とのお話をお聞きし、私は改めて、自分自身が志木高サッカー部を卒業して約30年が経過したということを実感しております。考えてみますれば、渡部先生が私達をご指導して下さった時の先生の年齢を、私達はすでに超えてしまった計算になります。その先生が退任されるのは、ただただ寂しいということ以外に表現のしようがありません。最近私は私も、正月の蹴り初めに1年おきにしか参加せず、なかなか先生とお会いする機会もありませんでした、それでも行けば必ず顔を拝見でき、そのたびに何か高校時代の懐かしい気持ちに戻れたような気がしたものです。

思い出起しますと、私が志木高サッカー部に入部した日は、たまたま「サーキットトレーニング」の練習日であり、ほとんどボールを使用せず、最初から最後まで「ダッシュ↓腹筋↓背筋↓ジャ

ンプ↓…」の繰り返しでした。初日で、サッカー部をやめようと頭に浮かんでいましたが、それを見越してか、先生から「明日もこいよ！」と言われたことを今でも覚えております。あの一言がなければ初日で辞めていたかもしれません。また、当時の夏合宿は岐阜のスポーツセンターで行なわれ、とにかくやたらと暑かったこと、心優しき(?)上級生の皆様等々、当時は苦しかったことも、今ではよき思い出となっています。

この30年の間に、日本ではサッカーを取り巻く環境は大きく変わってまいりました。日本国内にプロリーグが発足し、ワールドカップを開催するなどは、その当時想像すら出来ませんでした。当時は、全日本の試合、あるいは天皇杯の決勝ですら数千人の観客しか入らないという時代であった、と記憶しております。また、今では一般的に使われている「ボランチ」などという言葉も、当時は存在していませんでした。

そのようにサッカーを取り巻く環境、戦術は大きく変わってまいりましたが、渡部先生をはじめとするサッカー指導者の方々の、サッカーにかける「情熱」と「愛情」は昔と何ら変わることはなかったものと思います。

高校の3年間で渡部先生と過ごせたことは、私達の同期15人(私達の代は、試合結果はともかく、誰一人退部するものはいませんでした。また留年した者もおらず、それだけは自慢となっております…)にとって貴重な財産となっています。惜しむらくは、もう少し良い試合結果を出し、

先生を喜ばせてあげたかった……ということを我々自身の反省を込めて、皆それぞれに感じていることと思います。

私も最近は何をとったせいでしょうか。若かりしころの夢をよく見るようになってきました。しばしばサッカーの試合をしている夢も出てきます。夢の中では、志木高サッカー部は連戦連勝なのですが……

3年間ご指導いただき、渡部先生には、改めて深く感謝申し上げますとともに、教師の職を退いても、何らかのかたちで今後ともサッカーに関わっていただけたら、と願う次第です。

渡部先生、本当にありがとうございました。いつまでもお元気でいて下さい。

『サッカー部回想録』

昭和52年3月卒
有志一同

『かくも幸せなる邂逅』 木村政紀

他校のボールをギツて殴られ、煙草を吸って殴られ、麻雀をして殴られる同期生を横目に、勉強は最悪ながらサッカーは優等生の私は練習中に意図の無い適当なパスを出したら突然すごい形相でぶつ飛ばされた。先生の繰り出す練習はその毎日が新鮮で、あの濃密な一時期は強烈な印象となって体に染み付いている。今コーチとしてゴールデンエイジの子供達に接してみても、ぶつ飛ばす事こそ無いが口調も教えるスタイルもあの時の渡部先生にそっくりな自分が土日のグラウンドに居る。渡部先生の教えはきつとこの小学生も次に伝えてくれると思います。本当に有難うございました。

『志木高サッカー部と渡部先生』 山路敏之

志木高サッカー部の思い出は何と言っても大学の前座とは言え、国立競技場でサッカーが出来たことです。グラウンドを踏みしめた時の、芝の感触・スタンドのライト、感動でした。

2つ目は、高校3年の県予選、15人目で決着したPK戦です(対吉川高校)。これってギネスブックものでは？ と今でも思っています。外せば負けのところを決めたことも私のささやかな自慢の一つになっています。

一方渡部先生との忘れがたい思い出とは、先生ご自宅近くのサウナにご一緒し、裸で2〜3時間過ごしたことです。理由は、周知の事実ですが、子供が読むかもしれませんが、割愛しますが、なかなか得難い経験でした。

渡部先生！ 長い間お疲れ様でした！

『ペナルティーキック』 神山洋一

あのクルリとした目が飛び出るのではないかと心配するほどの顔で、頭から煙を出して叱咤激励する渡部先生の声が頭から離れない。その時は私も震え上がったものだが、何故かその声には

愛情があつた。今思うととても懐かしい。北海道への修学旅行に行かず戦つた県予選の吉川高校戦、PKを2回も外し敗戦に導いてしまったのは私です。幸か不幸か渡部先生は引率のためその場におらず、罵倒されずにすんだが、結局結婚式で怒られた。人生の汚点でもあり良き思い出でもある。渡部先生有難う御座いました。そして本当にお疲れさまでした。

『人生の奥深さ』 吉森桂男

渡部先生、本当にお疲れ様でした。

30歳を迎えて志木高サッカー部のお手伝いを再びする様になつたり、また仲人をして頂く等卒業後も公私共にすっかりお世話になつている小生ですが、高校時代の思い出と言えば、相手の事前リサーチや最新フォーメーションの採用等常に最新・トップレベルの戦術と、多種多彩なフェイントに尽きます。

特に先生のフェイントは四対二の時の「またぎフェイント」を始めとするさすがに全日本のセインターフォアードという華麗な足技から、PK練習の時に我がチームのGKを相手に「ヒロ、一番取りにくい右隅にけるで!」と言つてから左隅にゴロで蹴つたという「口技」に至るまで実に多種多彩であり、純粋な高校生にとっては人生の奥深さについて考えさせて頂いたものです。

(小生に至っては先生に結婚式の仲人をお願いしたのですが、新郎新婦の紹介の部分で見事なフェイントに参った次第。)

残念ながら我々はこうして教えて頂いたことを消化出来ず、戦績面では大したものは残せませんでした。数多くの「愛の蹴り」共々その後今日まで何とかやってこれているのもそうした教えのお陰であることは間違いありません。本当に有難うございました。

【追記】公式戦結果

① 新人戦一次リーグ敗退

所沢高校ともう一校とのリーグ戦で確か、三チームが勝ち点、得失点差で横並びとなりましたが、総得点で二次リーグに進出出来なかったのではと記憶しております。試合中にクリアーされたボールを取りに行き、グラウンドの脇の木の枝にユニホームを引っ掛け、穴の開いたユニホームを着たままプレーをし続けたCFが居たと思います。

② 春のインター杯予選

二回戦は松山高校(木村君指摘のボール事件の相手校)に2対0と快勝するも、三回戦では浦和西に0対5と粉砕される。

③ 慶早定期戦(対早実)

1対1の引き分け。「分岐点」となり、以降試合に出して貰えなかった者が出ました。空中戦

で競り合った際に相手CFの後頭部にヘディングを叩き込み脳震とうを起こさせた人間が居たはずです。

④ 秋の全国大会県予選

吉川高校と0対0の後、山路君指摘のPK合戦へ突入。翌年一年下の後輩達が県予選で同じ吉川高校と対戦し、リベンジを果たしていただいたとも記憶しております。

『昭和50年から52年の志木高サッカー部の思い出』

昭和53年3月卒

阿部 秀樹

一年生の時は、吉岡さんがコーチ一年目で本当によく面倒を見て頂きました。当時渡部先生は部活休養中で、あまり練習をみられることがなく、「用務員のおじさんがキャプテンに何か小言を言っているなあ」と思っていたら、それが渡部先生だったと知り、後でとてもビックリしました。トベのほか、焼きドングリという先生の仇名を知ったのもこの頃でした。

それから、夏に岐阜へ遠征をしました。1年生にとっては初めての合宿で大変暑く、きつい内容でしたが、夜中のサーキットも今となつてはいい思い出です。

1年生では試合にも出られず、部活はしんどかったけれど渡部先生の人柄に触れ、サッカーに集中し出したのもこの頃でした。

当時のチームは強かったのですが、9月の予選で聖望に負けてしまいました。

二年生での思い出は、9月の予選最終戦で吉川にPK負けしたことです。双方譲らず11人全員けり終え2巡目にまでもつれこみました。PK戦の恐ろしさや冷酷さを知りましたが、同時にこういう時には人はどうなるのか、どうすれば良いのかという心構え、対処のしかた、といったものを学んだと思います。試合内容は負けていなかったもので、先輩達のためにも来年は是非1次予選突破を果たしたいと誓ったものでした。

三年生になると、馬小屋だった部室も新しい部室棟となり、気分一新。怖かった先輩方も去り、かわいい一年生が入ってきました。

なぜか華奢な奴ばかりでチームも一回り小型化したような印象でした。

三年生のスキルが他を圧倒しているのではなく、一、二、三年生全体でチームを作っていました。それまで一年生の仕事だったグラウンド整備も、「三年生が率先してやるように」と先生から言われて、何だか上級生の特権がなくなったような、複雑な気分になりましたが、前向きに捉えて進みました。

〈昭和52年 高校選手権 埼玉予選〉

新人戦と春の大会は振るわなかったもので、9月の予選は絶対負けられない状況でしたが、一回戦の相手が私立越生だったので相当なめてかかりました。この年何度も練習試合で勝っており、

油断していました。試合前に渡部先生が突然「今日はPK戦で勝つから」と言って、1年生ふたりに蹴らせるという今までにないPKオーダーを発表しました。先生も悪い冗談を…と思いながら、試合開始。ところが、敵は握手の時から喧嘩腰で気合十分でした。その気合に押されて試合のリズムもしだいに敵に握られ、とうとう先取点を取られてしまいました。それから却って落ち着き、終了間際に同点に追いつき、PK戦となりました。この時の主審は翌日の対戦相手であり昨年因縁の吉川高校の監督さんでした。PK戦をクリアできなかった昨年を思い、また試合前に「今日はPK戦」といった先生の予言を思い、不思議な廻り合わせを感じました。結果は見事、1年ふたりが決めPK戦5人で勝ちました。反省しきり、我々には予想外の薄氷の勝利でした。

次の日2回戦は、因縁の吉川高校との対決です。昨年のリベンジに燃えました。1回戦の反省から作戦を大幅に変更しました。今で言う3―5―2のシステムです。敵の監督は、我々の試合を主審として見ていたので、その変化に驚いたと思います。得点は2―1でしたが、試合内容は圧倒していました。

3回戦は、1次予選突破という、我々が1年の時から越えられなかった壁への挑戦です。この年、予選の全試合にお母さん応援団が来ていたので、我がチームは有名でした。この日も相手の所沢高校から「坊ちゃん達、今日はママが少ないね？」などと揶揄されましたが、チームの実力に自信を持てるようになっていた我々は全く気にせず戦い、2―0で念願の2次予選進出（ベスト

16)を果たしました。シュートを一本も打たれない、完勝でした。このような形で私達は、私立越生との劇的PK戦を制し、因縁の吉川高校へのリベンジを果たし、念願の1次予選突破を果たしました。その後1ヶ月ほど措いて2次予選は、初戦の県立浦和に0-2で負けました。試合内容は優勢でしたが、こちらのシュートはことごとくバーにはじかれ、敵の数少ないシュートがみなポロツと入ってしまうという、負けた気がしない負けでした。敵の試合巧者振りが上回っていました。

3年間で初めて2次予選まで進めて、このチームは11月まで延命したのですが、この1ヶ月間の個人技術とチーム戦術の進化・成長には驚きました。やはり1次予選(9月)で終わっては駄目です。あのPK戦に負けていれば、何もなかった筈です。勝負は紙一重、これは本当に貴重な体験でした。

この年は結局ベスト16止まりでしたが、埼玉代表は全国を制すると言われていた時代で頂点を目指せる位置まで行けたのは幸せだったと思います。

このような3年間に、書ききれないいろいろなことがあった3年間でしたが、貴重な機会を与え、サッカーを教えて下さった、渡部先生、吉岡コーチ、諸先輩方・同輩・仲間達に今も改めて感謝しております。

『我が慶應志木高サッカー部』

昭和54年3月卒

八木 充

私がサッカーに魅せられたのは一九七四年の西ドイツで行われたワールドカップでした。当時中学2年だった私は友人に促されて決勝の西ドイツ対オランダ戦の生中継（確か日本では初のW杯決勝の生中継だったと記憶している）を興奮しながら見たのを今でも忘れられません。「リベロ」という全く新しい概念の創設者であるベッケンバウアー率いる西ドイツと「トータルサッカー」を標榜しオフサイドトラップを多用した全員攻撃全員守備の「空飛ぶオランダ人」クライフ率いるオランダとの対戦は当時のサッカー界の最高峰を決めるに相応しい対戦でした。それ以来サッカーの虜になってしまった私は高校は大学受験のない付属高で3年間思いっきりサッカーをすることを心に決めダメモトで受験した慶應志木高にまんまと入ってしまいました。

入学早々にグラウンドに見学に向かい次の日からは練習に参加させてもらいました。

渡部先生は当時1年生の体育も担当されていたので授業でお会いしたのが最初だったか、サッカーグラウンドでお会いしたのが最初だったかは記憶は定かではありません。しかし、正直申し上げて新入坊だった私自身がお坊ちゃん高校との先入観を持っていたこともあり、高校の3年間でこれほど濃密なサッカーの指導を受けられるとは予想だにしていませんでした。高校に入ってから中学のサッカー仲間と会った際には「俺の高校にはこんなにスゴイ監督がいる」とよく自慢していたものでした。

当時の2年先輩は広中さんがキャプテンを務められ、後に1年先輩では小杉さんがキャプテンを務められました。それぞれの先輩方の代については諸先輩の文章にお任せするとして、私達の代をご紹介していきたいと思います。

私達の代は、自らキャプテンに立候補した大川（今ではベンチャー企業の社長を一丁前にやつてる）、マネージャーは度重なる腕の骨折にもめげずにひたすら転ぶ練習をしていた麻生、副将は色白寡黙で渡部先生から「ハニワ」と命名された茨城、ヘッドイングだけはやたらと強かった町田、日本人離れした顔立ちでねちっこいスイーパーの長屋、群馬から出てきて唯一人の寮生の金子、後に米国に1年留学した野田（彼も今は社長らしい）、野球場からユニフォームのままサッカー場にトコトコ歩いてきてそのまま野球部から転部してしまったGKの柳川（今は警視庁の刑事）、そして私といったメンバーでした。

中学時代に東京選抜に選ばれた経験をもつ大川の攻撃力を中心に（守備はさっぱりでしたが…）、1年後輩の内田君や関君、2年後輩の大野君や高橋君・佐藤君等の助けを得て3年生の最後の大会では地区予選を勝ち上がりベスト16までいく事ができました。最後の試合はベスト8を賭けて埼玉栄が相手だったと記憶していますが浦和西のグラウンドで0―4の完敗でした。収穫祭の日と重なり試合後に学校の戻り体育館で「若き血」を連呼する友人達を傍らで茫然自失の状態で茨城と眺めていたのを何故か鮮明に覚えています。

私自身は2年生の時に左膝を負傷し、十分なりハビリを行わずに復帰したのが祟ったのか、幾度となく膝の故障を繰り返し、3年生の時には後輩のコーチ役に回っていた為に選手としてチームに貢献できなかった事は今も心残りではあります。

ただ、そのときに渡部先生から教えられたのが「奉仕の精神」です。チームにとって自分がいま何ができるのか、周りをよく見渡して状況判断し行動すること、メキシコオリンピックの時の八重樫さんの例を引き合いに出されよくお話をしていただきました。お陰で今も仕事上ではそれが私の基本スタンスとなつてしまいました。

そういつた縁もあり、高校卒業後も志木高のコーチとして引き続き志木のグラウンドに足を運ぶことになり、後輩諸君が県のベスト4まで進出し、その後全国優勝を果たしてしまつた武南を相手に準決勝を戦つた際にもベンチに座らしてもらいました。

高校大学を通じた7年の間、渡部先生にご指導を頂き、その一つ一つが現在の私を形成する礎になっていくような気が致します。

実は、私が渡部先生の事を心底「スゴイ！」と思った事が2度ほどあります。

1度目は私が高校2年生の時の試合で、当時1年生だった内田君と折笠君を2トップに据えて戦つて見事に勝利を収めたときです。当時のフォーメーションと言えば、ストッパーとスイーパーをおく4-3-3をどこのチームも採用しており、それが当り前だと思つていました。そこで渡部先生が相手チームと自チームの戦力を分析し導き出したのがこの2トップの布陣でした。戦術とはこういうものか、と脱帽の思いでした。また大袈裟に聞こえるかも知れませんが、決して既成概念に拘らずに柔軟な発想をする事の大切さを学んだような気がします。

2度目は私が大学時代に監督とコーチという立場で合宿中に晩酌を共にさせて頂いたときのことです。そのときに渡部先生は当時の選手一人一人の将来について話しておられました。その時はもはや「選手」としてではなく「生徒」あるいは「教え子」として、大きな愛情を持つてあんなに沢山いる生徒の正に一人一人の事を真剣に考えていらつしやる事がヒシヒシと伝わってきました。私自身も先生の教え子の一人として、そのように考えて頂いていたかと思うととても有難く光栄に思えました。その時に心に決め、その席上で将来自分が結婚するときの仲人をお願いし、酔つた勢いで快諾頂いたのを覚えています。

とりとめもない文章になってしまいましたが、私たち教え子は志木のグラウンドで学ばせてもらった事は山ほどあります。それらを一生の財産とし、同時に後輩諸君に少しでも伝えていく事が私達の使命だと考えています。

最後に、もし私の膝がもつと頑丈だったら私の代の戦績はもつと違っていただろうと今でも信じてやみません。

『志木高サッカー部での7年間』

昭和55年3月卒
飯塚元一

「上半身の筋肉を鍛えなきゃいかんからキャッチボールの練習をしろ!」、1年の春合宿、渡部先生らしい(?) こんな一言に始まり、ボールを「蹴る」つもりでサッカー部に入部した私も気が付いてみればゴールキーパーを目指していた。そして、ボールを「捕り」始めて間もないその夏(昭和53年)、当時のハンガリーナショナルチームGKコーチ タマス・ギュラ氏、バツシャススポーツクラブGK サガル・ジョルジュ氏を招いての日本サッカー協会のゴールキーパー講習会が浦和駒場サッカー場を中心に開催された。GKのスキル開発、戦術、トレーニング方法といった分野が遅れていた当時の日本では、画期的な試みであったと記憶しているが、渡部先生がその講習会のマネージャーとして、また通訳として中心となつて運営にあたられた。講習会の参加者といえば、当時フジタ工業で天皇杯優勝GKの栗本氏をはじめ多くの日本リーグのGK、当

時のユース代表G Kといった錚錚たるメンバーばかりであったのに、サッカーを始めて1年余り、G Kを始めてわずか数ヶ月でこのような講習会に参加させて頂く機会を得た。当時は、大変に戸惑った事も覚えているが、志木高サッカー部では渡部先生のサッカー協会での活躍や広い人脈のお陰で普通ではなかなかできないようなこんな体験を色々と積ませて頂いたことは、今も良き思い出である。

2年生の春合宿の際には当時金子先生が率いておられた県立志木高校との練習試合で、セービングに入ったときに、相手FWに顔を蹴られ、左目が腫れほとんど見えなくなっただけでもあった。怪我の瞬間は痛みとの戦いで精一杯であったが、暫くすると自分の心の中には、これで合宿から帰れるかもしれないという期待(?)が膨れてきていた。「大丈夫か? 帰っても良いんだぞ。」と何度か渡部先生より声をかけられたが、「帰ります。」とはどうしても言えないようなこちらの心の壁を見通したような言葉や言い方、時にはジェスチャーそして温かさ。結果としてこの合宿も最後まで参加する事ができ、G Kとしての自信を得る事ができた。渡部先生から受けた、スキルの面だけでない機微に触れたご指導には今でも頭の下がる思いである。

多くの事が思い出される志木高サッカー部での3年間であったが大学生としての4年の間も紆余曲折はあったが、志木高コーチとして、また野火止サッカー倶楽部の一員として、志木高サッカー部のお世話になった。その間には、全国高校サッカー選手権埼玉予選でのベスト4進出とい

う快挙もあつた。また、大学4年の時には、野火止サッカー倶楽部の一員として、シンガポール遠征に行き、スタジアムで多くのシンガポール観衆のもとナイターでの試合をしたことも思い出の一齣である。更に、大学4年の夏には、コーチングの勉強のため、渡部先生のコーチングスクールでのコーチであるジョン・ジャーマン氏の関係で当時同氏が監督をしていた、イングランドのプロチーム Mansfield Town FC に約一ヶ月間滞在させて頂いた。イングランドのクラブの地域と一体となつた運営、その多くがアイルランドからの選手であつたがユース選手のプロとしてのサッカーに対するハングリーな姿勢等々多くの勉強をさせて頂くことができた。

選手として、コーチとして志木高サッカー部では、渡部先生、そして実に多くの諸先輩のご指導を仰ぎ、また広い視野から多くの体験をさせて頂いた。多くの思い出と共に一生忘れ得ない7年間に感謝している。

『志木高サッカー部の思い出』

昭和56年3月卒

有志一同

私たち55年卒（主将縣君、主務菅沢君）は、選手権予選の戦績はベスト32でしたが、前評判は悪くなかった。翌年の56年卒（主将福島君）がベスト4に入ったのがある意味象徴している。一年時は30人を超え、有望な選手もたくさんいたが、卒業時には8人となった。そのうち2人が大学の体育会で選手として活躍。何人かの寄せ書きを集めてみた。

〈縣恵一君〉

私のサッカー歴は、中学からスタートし、以後、30年以上、球を蹴り続け、今も至って健康にボールを週末は追っている。当時の上級生には、大川主将を始めとして、町田さんや長屋さんといった上手い人が多く、すぐ上の代にも関さんや内田さんといったテクニシャンが揃っており、同期

にもドリブルの上手い大野君や基礎がきちつとしている榊原君や高橋君、シュート力がすごい佐藤君、そういった人たちと体系だった練習をきちんとほぼ毎日行なうことが楽しかったし、コーチとして週末は高見澤さん、平日は吉森さん、広中さんがほぼ毎日見て頂けるといふ非常に恵まれた環境にあった。とりわけ部長兼監督の渡部先生が私のその後のサッカー人生に大きな影響を与えてくれた。まさか慶應の付属校にサッカーへの造詣が深く、協会にも人脈がある方が先生としておられるとは想像してなく、高校で初めて本物のサッカーに触れた思いであった。練習時の言葉にはサッカーの原点が沢山、詰まっていた。「パスしたら動け」、「常にボールを貫う前に周りを次のプレーのことを考えておけ」と言った基本的なことの大切さ、自らプレーして教えて頂けるフエイントなどは勿論だが、「試合終了のホイッスルは次の試合への準備のための合図である」とか「サッカーは少年を紳士にしてくれるスポーツ」とか、一言一言がその後の自分の人生に大きく影響した。戦績は、さっぱりと言っても良かったが、先生は目先の勝負に拘らずに良いサッカーをすること、個々の選手の可能性を伸ばすことを主眼に置かれていた。当時、色々なポジションをやったが、元々FWだった私が急に2年生でサイドバックをやらされたり、3年生でスイーパーなどもやらされたが、その経験がその後のプレーの幅を広げた。本当に、渡部先生が退官されるとは信じ難いが、今後は何らかの形で自分が志木高校に恩返し出来ればと思う次第である。

〈菅沢 英次君〉

渡部先生、長い間大変ご苦労様でした。私にとって高校時代最も印象に残っている試合は、2年生春の大会です。当時マネージャー兼務だった私のくじ運が悪く、2回戦で強豪・浦和西と当たることになったのです。その際に渡部先生が立てた作戦は極端に守備的なものでした。「後半20分までは攻めるな！ 自分の守備範囲から外には出るな！」。それが奏功し、ハーフタイムにベンチで叱咤される浦和西イレブンを尻目に、こちらは「してやつたり！」とほくそえんでいました。結局攻撃に転じる後半20分の直前に失点し、惜しくも敗れましたが、渡部先生の作戦が見事に当たった一戦でした。渡部先生のご指導は厳しかったと言うよりも、今にして思えば大変科学的なものだったように思います。「エアロビクス」やら「無酸素運動」やら当時は聞きなれない言葉で、クロカンやクーパー走など大変苦しい思いをした記憶がありますが、後になつてより一層渡部先生の偉大さを感じました。当時の渡部先生のご指導があつたからこそ、今の自分があると思っています。長い間のご指導本当にありがとうございました。

〈高橋 直人君〉

現役の時とは怪我ばかりでご迷惑をおかけしました。骨折していたのに気づかないのは自分ぐら

いでしように。

〈落合みのる君〉

思い起こせば、サッカーを知らない生徒が高校から練習を始め、県大会などの公式試合に出場できるまでにたくさんのお話を教わりました。試合前の心構えや大会に向けての戦略、戦術など、今僕がいる環境にも十分応用の利くことばかりです。正直言って、いままで小学校や中学校、高校、大学の授業で学んだことよりも役立っていて、豊かなものを手に入れています。本当に感謝しております。

〈佐藤守君〉

渡部先生には、公私ともにお世話になり、どれだけのお返しができているかわかりませんが、自分自身が成長することで、そうありたいと願っています。志本校で、大事な思春期の3年間で過ごしたことは、大切な財産になっています。なかなか気づかない当時でしたが、成長の手助けをして頂き、かけがえのない時間を過ごせたことに感謝しております。

今までの熱いご指導に対する御礼と共に、これからも末永くお元気でいられることを祈念しております。ありがとうございます。

55年卒一同より

『埼玉県ベスト4の悪がき達』

昭和57年3月卒

石塚雅之

今年で43歳になりますが、これまでの人生を振り返ると、慶応志木校での3年間は、青春を謳歌した最高の時期だった！

もう25年も前の事であるが、いろいろと思い出してくる。

最後の埼玉県予選での準決勝進出はもちろんだが、夏はサーフィン・冬はスキー・授業をサボつてのマージャン・サッカー練習後の飲み会・本書には書きづらい悪さ等々、早熟の悪がき達と過ごせたこの3年間は、非常に楽しく愉快な時期であつた（親の脛をかじりまくって！）。

悪がき同期の構成は8名で、3人は中等部あがりの「小西・福島・土屋」、5人は受験組の「浅見・石崎・大竹・小幡・石塚」である。また、3年生の時のチームには、1年次上の榊原さんも加わつた。

ここで、サッカー部の事を思い出してみる。

まず、われわれ同期だが、特徴を大別すると、“わがまま者”（わがまま順）福島・小幡・石崎・石塚、or “頑固者”（頑固順）小西・土屋・大竹・浅見しかおらず、かつ、各人の個性が非常に強い、困ったメンバー構成であつた。

この個性派集団の体制は、主将福島（一番わがまま）、副将小西（一番頑固）十石塚（一番ちゃんぽらんぽらん）で、これでよく纏まつたナーと今更ながら思う。

次に、当時のスタッフに対して残っている印象は以下の通りだ。

① 渡部先生：いつもキャプテンの福島を叱っていた？

② 高見沢さん：とにかく怖かつた！ 尚、たまにはあるが、練習後にデートの約束があつたのか、aramis（オーデコロン）の匂いがした。

③ 広中さん・吉森さん：悪がきの雰囲気があり、両者でからかいあつてた？

④ 八木さん・麻生さん：気真面目で、サッカー指導に真剣であつた。

悪がき達を率いて埼玉県準決勝まで導いて頂いたのは、並大抵のご苦労ではなかつただろうと、大いに感謝申し上げる次第であるが、一方で、悪がき達と過ごした時間は、非常に楽しんで頂けたのであろう？ とも思う。

そして、後輩達。うろ憶えであるが、強い黒田・速い石部・センスの遠藤と白塚・ちよつと頼

りない松岡。

上述の諸先輩そして、サッカー仲間達と戦った最後の埼玉県予選で思い出す事は次の通り。

① 一時予選（3試合ほど勝ち抜けた）：たぶん初戦の時。遠藤がなかなか自分に縦パスを出してくれない。出してくれば何点でも取れたのに！ 試合後に聞いたたら、「今後の試合で相手にマークされるから」との由。俺からすると、「もつと遊ばせろ！」であつた。

② 二次予選初戦（立教）：負ける相手だとは思わなかつたが、結果はPK戦。最後に石部が入れて勝つたはず。皆が喜んではいやいだが、渡部先生からはしやぎ過ぎと叱られた。

③ 準々決勝（埼玉栄？）：攻められ続け、厳しかったが、後半の半ば、榊原さんのクリアーが自分の足元へ納まつた。ペナ近辺までドリブルして 撃つたら入つた。ラッキー！

終了間際には、土屋のチョンボセンタリングが直接ゴールイン！これまたラッキー！！何と、ラッキー2回で埼玉県のベスト4になつてしまつた。

④ 準決勝（同年全国大会優勝の武南）：相当格上だと思つていた。試合開始早々に相手PKとなり、これでもう終わりと思つたが、何と失敗。だが、やはり相手は格段に上で、前半は0-1。しかし、後半、相手ペナ5M後方でのFKチャンス到来。自分が蹴ろうと思つたら、小西が蹴ると言つてきた。一番頑固な小西なので、譲るしかなかった。だが、これが正解で、GKの右手をかすめてゴールイン！

但し、これで、相手が本気になってしまい、この後は怒涛の攻撃で、自分も戻って守ろうと思つたが、体が動かずに何も出来なかつた。結果は1―3。

負けた事より、最後の試合で自分の体が動かかなかつた事が非常に悔しかった。

これで、悪がき達の出来すぎた高校サッカー物語は終了しました。

この物語の監督である渡部先生他スタッフの皆様のご指導に心より感謝申し上げます。

尚、毎日のサッカー練習から解放された悪がき達の 楽しく愉快な高校生生活物語は、その後、

高校卒業まで続きました。

『現役とOB』

昭和58年3月卒

白塚重典

私達の代は、主将・遠藤、主務・大蔵のほか、石部、千田、土屋、羽田、羽生、深沢、松岡、そして白塚の10名が最終的に残ったメンバーです。

戦績としては、2年のときに、冬の選手権の1次予選を勝ち抜き、最終予選で準決勝まで進出し、全国大会で優勝した武南高校に1対3と敗れたというのが一番記憶に残るものだったと思います。3年のときには、1次予選の決勝で敗退し、最終予選に進むことはできませんでした。

高校時代、渡部先生からは、サッカーの技術や戦術のみならず、人格形成のうえでも、大切なことをたくさん学びました。先生は、例えば、「サッカーは子供を大人に、大人を紳士にするスポーツ」「ボールを通じて、自分の心を磨く」「グラウンドには宝物がたくさん埋まっている。それを見つけて出すのは、一人ひとりの努力」といったことを繰り返し言われていたと思います。

ただ、私がこうした渡部先生の教えを自分の中で消化し、プレーの中で活かすことができるようになったのは、大学に入り、コーチとして高校生と接するようになってからだのように思います。高校時代を振り返ると、サッカーのプレーヤーとして、不完全燃焼感が残っています。これは、やはり自分の人間としての未熟さゆえであつたのだと今更ながら感じています。

高校卒業後、私の同期では、石部、遠藤、羽生と私の4人がコーチとして、志木のグラウンドに通い、高校生と一緒に練習をしていました。また、この時期には、大学生の志木高OBを中心に組織された野火止キッカーズで、朝霞地区社会人リーグに参加し、時には高校生の練習試合相手になったりもしました。こうした中、大学1年のときには、東京都のサッカー・リーダー・スクールを受講する機会を得ました。この講習は、単にコーチとしての基礎を培うというだけでなく、自分自身がプレーヤーとして野火止キッカーズでプレーするうえでも有益な体験だったと思います。さらに、大学時代には、野火止キッカーズとして、1年のときにシンガポール、4年のときに香港と、2度にわたる海外遠征を経験したことも、自分自身の目を広く海外に向ける、非常に貴重な体験だったと思います。社会人になってからは、野火止キッカーズが埼玉県リーグ2部に昇格し、県内各地を転戦し、厳しい試合を経験する機会も得ることができました。

高校時代、志木のグラウンドでは、渡部先生に加え、既に社会人になられていた高見澤さんから、週末、熱心な指導を受けました。また、平日の練習では、大学生のコーチであつた、吉森さ

ん、広中さん、麻生さん、八木さん、飯塚さん、佐藤さん、榎原さんといった皆さんに、お世話になってきました。私が大学時代にコーチをやろうと考えたのも、こうした先輩たちから続いている、志木高サッカー部のよき伝統を伝えたかったという気持ちが大きかったように思います。今後とも、野火止サッカー倶楽部を通じて、現役の支援を続け、こうした志木高サッカー部のよき伝統を継承していきたいと考えています。

そうした中で、OBの組織として、野火止サッカー倶楽部の現状に心残りのことは、この組織の立ち上げにも尽力された高見澤さんとの関係が疎遠になっていることです。時間がかかるかもしれないませんが、高見澤さんには、ぜひ野火止サッカー倶楽部の活動に復帰してきて欲しいと思っています。

『グラウンドで過ごした3年間』

昭和59年3月卒

河手 哲雄

「高校生活は渡部先生と高見澤さんにグラウンドで鍛えて頂いたことに尽きる」。同世代の多くの方がそう感じているのではないか。大人になることや、世界的視野といったことをサッカーを通じて教えて頂いた。この機会に、今も忘れない先生の教えを思い起こしてみた。

①試合に勝つ為に練習するのではない。少年を大人にする為。②大志を抱け。常に大きな目標と小さな目標を持て。③地球儀を見よ。世界は広い。言葉が通じなくてもボールを通じてわかりあえる。④勝負よりフェアプレー第一。⑤己に勝て。精神的限界は肉体的限界より先に来る。自分が苦しい時は相手も必ず苦しい。何につけ一喜一憂するな。⑥健康管理は自己責任。グラウンドに出たからには100%ファイトせよ、コンディションが悪ければ100%休養せよ。⑦頭を使え。ボールを持った人が王様。自分は何をすべきか、周りを見て、ボールが来る前に考えてお

け。⑧狙いは何かを理解しろ。味方がうけとりやすいパスがいいパス。弾丸ライナーでもボテボテゴロでも、入れば同じ一点。⑨自分の長所を磨け。やらされ練習では上達しない。汚れたスパイクからいいプレーは生まれない。勉強すべき時にできない者はいいサッカープレーヤーにもならない。⑩ここぞという時に全力を発揮できる選手・人間たれ。

更に、先生が行動で示されたことも思い起こしたい。

①生徒を大人として扱った。②無限の可能性があると生徒を励ました。③上手・下手の区別なく全員に声をかけた。④勝利の喜びを体験させた。⑤得点者だけでなくゲーム中の貢献一つ一つを誉めた。⑥海外遠征や外国人チームとの対戦など視野を広める機会を与えた。⑦引つ込み思案の生徒にこそ頻繁に声をかけ、自己主張を求めた。⑧トンボかけや草取りを率先したり、「これ以上やるとこわれちゃう」と選手交代したり安全第一を留意した。⑨何であれ話しが愉快だった。⑩手本を自らやって見せる時に上手かった。⑪試合前に相手監督と握手をかわしたり、部の運営方針や子供の成長を父兄に丁寧に説明したり、休日は必ず守衛さんに挨拶をしたり、理解者を増やすことに留意した。⑫コーチを信頼し任せた。⑬ハーフタイム時、途中スコアによらず冷静に迎え、わかりやすい指示を与えた。試合後、勝敗によらず優しく迎えた。⑭合理的であり、規則で縛らず自主管理を求めた。⑮チャレンジを促し、各自に高い目標を示し続けた。

最後に、ある練習風景を再現してみる。夏休み午前10時。高見澤監督、八木コーチ、麻生コーチ、

飯塚 GK コーチ。参加部員は25名。ケガで別メニューが数名。二人一組でリフティングの後クロカン大回り3週。スパイクの音がする所は照返しが眩しい。林の中は日陰が嬉しい。横目に他クラブの活動が見える。軟式テニス、水泳、柔道、コーラス、硬式テニス、野球、ラグビー、グラウンドホッケー。今日も中澤とトップを争った。終わった者から水。グリッドを使った4対2、GKはキャッチボールを始めて暫くすると渡部先生がグラウンドに現れた。全員集合。先生からの話し。まずは食事。「この炎天下、朝飯抜きはいらないな。おい●●（あだな）、今朝何を食べた」続いてクラマーコーチのエピソード。「クラさんは試合中にある選手を見て言った。彼に椅子を持っていけ。試合中だというのに寝ている」。次に今日のメニューの説明。ハーフコートにゴールを置いて3対3。GK付。「自分は何をすべきかを考えろ。周りを見て状況判断しろ」。突然練習を止める大きな声。「ストップ。●●、ここは見えていたか」。フィールドの中央へ寄って行き、出すべきスルーパスを自ら蹴って見せる。見事に裏へ通った。上手い。「オーケー、もういつちよいこう」で再開。皆、自分の番でない時も頭を使うのがクセとなった。そして12:00「ヒデやん、そろそろ終わりにしようや」。輪になって体操。その間リハビリ中の数名と談笑。終了後全員で円陣。先生の話し。「ベスト4の時、準決勝で武南とあたった。監督は大山。気胸をやってる。小西のFKで1対1に追い付いた。後半、星野・池田という飛車角を入れてきて1対3で負けた。彼らは埼玉代表となり全国制覇した」。渡部先生が熱心に語られた言葉やお姿は20年以上を経た

今も鮮やかに甦る。ざつと25に至ったが、皆さんは更にあれこれ思い起こされたのではなからうか。退官の節目を迎えられるにあたり、渡部先生、高見澤さん、コーチへのお礼の気持ちを表す適当な言葉が浮かばない。我々一人一人が先生の教えを実践し、そして継承することが、何よりの恩返しではないかと感じている。

『40歳にして想う志木高サッカー』

昭和60年3月卒

兼松公彦

渡部先生、長い間お疲れ様でした。また、志木で過ごした3年間ではサッカーの面白さのみならず、まだとても未熟だった高校生の私達に社会に出るための基礎を教えていただいたと思っております。本当にありがとうございました。

卒業してからもう21年も経ちましたが、先生から学んだものの考え方（大人の自覚、積極性、礼儀、コミュニケーション力等々）は社会人となった今、とても貴重な財産となっています。

私達は高校選手権の予選では1回戦であつさりと負けてしまったのですが、先生から見るとどういうチームだったのでしょうか。

今振り返ってみると、良いプレーヤーもいて、うまくかみ合っていれば結構良い結果が出せたような気がするのですが。ただし、必ずしも良いプレーヤーがいるチームが良い結果を出してい

るわけではないですね。高校生が持つ、強大なエネルギーをいろいろな方面に分散させてしまったのが原因でしょうか。確かに当時の私達は誘惑に弱い人間の集まりだった気がします。

中学生まで少年剣士だった私は、志木高に入学し憧れのサッカー部に入学したのですが、先生や同期の連中に乗せられ、気が付くとゴールキーパーをしていました。今更当時の希望を言ってもしょうがないのですが、サッカーをするからには点の取れるポジションをやってみたいと思っていました。フォワードが一番点を取れるのはわかっているが、そこは初心者なので贅沢はいえず、ディフェンダーでも得点することはあるのでキーパー以外だったらどこでも良い。それがサッカーを始めた時の正直な結構強い私の希望でした。しかし、やってみるとキーパーというのは試合全体を見渡すことが出来、勝ち負けに大きな影響を与える、とても重要で魅力のあるポジションでした。先生からはよく「後ろの声は神の声」と言われコーチングの重要性を教わりました。気が付くとキーパーの面白さに魅せられた私は大学の体育会でまで、それも関東一都リーグでプレーすることとなるとは、サッカーを始めた頃は想像もできませんでした。

チームメートは大学でも一緒にプレーした小柄だがスピードのある中野（結構ヘディングも強かった）、左利きの俊足ドリブラーの小幡（二番の点取屋）、高等（口頭）テクニシャン川田（今はカリスマ営業マン）、意外性の人タフマン井上（今でもあのループシュートは忘れられませんが）、長身ストッパー渡部、パワフルディフェンダー中里、気の優しい癒し系俊足フォワードの

沖村、2年先輩の名ストライカーの弟で独特の人生観を持つ石部（サッカーセンスは高い。）、右サイドの名手高橋、プレー中だけでなく普段もトリッキーな動きの小林（去年結婚しました。それも平日に深谷で！）、マネージャー春日（今はバイロットです。）、名門白幡中出身、キック力とサッカーセンスはチームトップクラスの後藤（体力に多少難点あり。）、いつも冷静な岡（やわらかいボールタッチが身上。）、志木高一の笑顔を持つ鈴木、マラソンチャンピオン石川、日本人離れた容貌の倉持など個性派揃いでした。この個性派集団でサッカーのみに没頭するのは困難なことだったのかもしれない。

しかし、戦績は別とすると中身の濃い3年間の高校サッカー生活を送れたと思います。雪の中の新人戦、国立競技場の早慶戦、善戦した栃木遠征や引退した後先生が企画していただいたシנגポール遠征などサッカーを通して学んだ経験はただの思い出だけでなく、その後の私達の人生に色々な形で影響を与えているのではないのでしょうか。また、志木高の恵まれた環境の中で渡部先生にご指導いただけたことは、とても幸運なことだと思っています。

私達は今年でもう40才になります。なかなか志木に行つて後輩の現役選手達にサッカーを教えることなどはできなくなってきましたが、伝統の志木高サッカー部OBとして出来る範囲の応援をしていきたいと思います。そして、これからも初蹴りで渡部先生とお会いできることを楽しみにしております。

『思い出とともに』

昭和61年3月卒

土方 康弘



私たちが志木高へ入学しサッカー部へ入部した年は、東京デイズニールランドの開園で始まり、大韓航空機墜撃事件などが起こった年でした。サッカー部の最後の年はサッカー界ではリパブルとユベントスの試合で大惨事が起こり、日航機の御巢鷹山墜落事故などがありました。

日航機事故で思い出すのは3年生の夏に坂戸へ遠征に行ったことです。夏の予選大会を前に坂戸西高だったと記憶していますが、練習試合を集中して行うため坂戸へ行き、夜は近くのビジネスホテルに泊まるというものでした。

試合の内容は皆体調が悪く一方的に攻め込まれ、良いところが出ないまま終わってしまいました。

前の晩ビジネスホテルに泊まったときに、渡部先生は泊まらずに一旦帰られてしまわれました。そのため我々は先生というお目付け役がいなくなり、反動で深夜まで起きていて翌日の試合に響いてしまったのです。それぞれビデオを見たり、おしゃべりをしたり、トランプをしたり、麻雀をしたりと気がついたらもう時計はとくに午前0時を回っていました。試合の遠征できているというよりはまるで旅行気分になっていたと、今思えば高校生のときとはいえ恥ずかしい限りです。

翌日の試合の内容を先生はご覧になって恐らく、前の晩どんなふうにごすごしたかお分かりになつていたでしょう。試合後に先生は何も言わず、それが逆に一番堪えたという思い出があります。先生は我々の自主性を尊重して一晩自由にさせたと思いますが、先生の期待を裏切つてしまいい残念でした。

そのあと最後の夏の大会に向けて暑い中練習をしたことも今となつては楽しい思い出の一つになつています。グラウンド10周走、エイトステーションの筋トレ、どれもきつい練習でしたがサッカーが上手く楽しく出来るようにと頑張りました。

そして夏の最後の試合は前半後半ともボールを支配して試合を進めていましたがなかなか点が

取れず、ノースコアで引き分けになりPK戦に突入しました。お互い一人二人と確実に決めて4対4になって5人目までいきました。

4人目まで相手のキックは全てキーパーの僕から見て右側に蹴っていたので最後も恐らく右側だろうと思い思い切つて飛びました。一瞬右側にきて「やった」思いましたがボールが右に切れていき4人目までのキッカーより遠くサイドにボールが決まってしまいました。我々の最後のキッカーのボールがゴールポストに当たった「カーン」という音とともに高校3年間のサッカーが終わりました。

試合が終わると高校生としてももうサッカーが出来ないという思いと、もつと練習出来なかったのかという思いで一杯でした。

渡部先生から聞いた言葉で覚えているのは「サッカーは子供を少年にし、少年を大人にし、大人を紳士にする。」というものです。当時は丁度少年から大人へという時期に渡部先生と出会い、今は大人から紳士へという段階にきています。サッカーそして渡部先生と出会った者として紳士に近づけるよう心がけたいと思っています。

サッカー部に縁があつて入りそこで多くの仲間や先輩後輩に出会えたことを感謝しています。それも渡部先生という師がいたらからこそと思っております。渡部先生どうもありがとうございました。

『志木高サッカー部』

昭和63年3月卒

中村直人



昭和62年度卒業の「ベース」です。昨年1月まで監督をしていたこともあり、渡部先生には、ひいては志木高サッカー部とそこに関わる全ての皆様には、人生の半分以上お世話になっていることになりました。同期を代表して、あらためましてこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。なお、「ベース」とは、渡部先生と初めてお会いした際、グラウンドで頂戴した私のニックネームになりますので、これから長いお付き合いになるであろう皆様には補足してお伝えしておきます。

さて、志木高サッカー部を通じて私達が得たものは、かけが

えのない仲間であることは勿論、渡部先生がよくおっしゃっていた「今自分が何をすべきか」を常に考え、実践していく術であったのではないかと思っております。またどんな相手ともコミュニケーションゲートして上手くやっていくこと、どんな時も慌てず冷静に対処することも当時グラウンドで訓練していたおかげで社会に出てからも少々のことでは動じずにやってこれたのではないかと考えております。

我々の代は、キャプテン道喜、マネージャー矢吹、副将が小松、中村、センターフォワード広田、ゴールキーパー深谷、ミッドフィールダー柳瀬、水落、フォワード中里の9人のメンバーで最終学年を迎えました。入部当初は10数人いた同期も、最後まで残ったのはこの9人となりました。当時は、毎年6月頃に国立競技場でサッカーの早慶戦が行われており、大学戦の前座として高校戦が行われておりましたが、まず志木校と早稲田実業、それから塾校と早稲田学院がそれぞれ20分間対戦しており、聖地国立でサッカーができる喜びと興奮は未だに忘れられません。貴重な経験をさせていただいたことを関係する皆様に感謝しております。当時対戦した早稲田実業には、大学卒業後鹿島アントラーズに入団した古賀君がおり、左サイドを再三決りましたが、センターバック道喜、ゴールキーパー笠原（2年）を中心になんとか耐え0-0で引き分けたのを記憶しております。また高校生活最後の大会となった選手権予選では1次予選決勝まで進出し、これがベストの成績となりました。この大会では同じブロックでシードだった浦和高校をホーム

に迎え、1―1からPK戦の末、辛くも勝利を収めたにも拘らず、ブロック決勝で秩父農工に延長戦の末1―2で敗れたのを未だに鮮明に記憶しております。私は怪我で戦列を離れておりましたが、その時に初めてチームの中で「自分が何をすべきか」考えるとはどういうことか遅ればせながら気付いたことを懐かしく記憶しております。

先輩方との関わりの中では、やはりOBを中心とした「野火止キッカーズ」と共に地域の社会人大会に参加したことや、練習試合をしてもらったことなどでしょうか。大学生や社会人の先輩方と接することで、サッカーの技術・戦術は勿論、人間的にも成長するチャンスを与えてもらっておりました。

当時先生が良くおっしゃっていた「サッカーは子供を少年に、少年を青年に、青年を大人に、大人をジェントルマンにするスポーツだ」という言葉は、卒業生の皆様の心にも篤く残っていることと思いますが、お世話になったことを忘れず、引き継いでいただいた宮橋先生や山中先生を中心とした志木高サッカー部の活動を、共に陰ながら応援して参りましょう。それが恩返しのひとつになることを信じて。

『先生に贈る言葉』

平成元年3月卒
有志一同

先生は、私の恩師です。

そんな当たり前のことを君は言うのか、とおっしゃる方もおられるでしょうが、私には先生が恩師であると言える理由が3つあります。私の青春のページに鮮明に残っている思い出とともに、これらを説明したいのです。

第一に、先生は私に「意地と自信」を植えつけて下さいました。入部した頃だったと思うのですが、左に比べて著しく不器用だった私の右足のキックについて、「お前のはこんなんだぞ」と例の調子で物まねをされましたよね。先生に真似をされた方ならお分かりと思いますが、とても悔しくて「チキショー、見返してやる！」と心に誓いました。その後先生からもアドバイスをいただきながらたくさん練習をして、右のキックも何とか人並みになりました。自分もやればで

きるんだな！ と強く感じた記憶があります。（そんなにうまくない！ と叱られそうですが）

第二に、先生は私に「頭を使つて要領良くやること」を教えて下さいました。先生にサッカーを教わるようになり、一見「こんなの意味がないなあ」と思うようなフォーメーションの練習も、試合の場面をイメージしながら練習すると、必ず役に立つのです。2年生の時の大会でフォーメーション通りの展開で私の絶妙な（！）パスで点が入った時は嬉しくてたまりませんでした。

第三に、先生は私に「リーダーシップとは」を考えさせて下さいました。主将に任命されてからは、とにかく周りに対して厳格であることが役割と思っておりましたが、2年生の冬、ある日の練習後に先生から「お前がちゃんとやっていることはみんな分かっているから、どうやればみんながついて来るか考えなさい」と諭されました。その後、自分がどれくらいリーダーシップをとれたのかは分かりませんが、今でも心に残る言葉です。

意地と自信、何事も要領を考えること、リーダーシップ。この3つは今の私の根幹です。社会人になってからも、壁にぶつかる度に先生が下さった私の宝物を最大限に生かして、乗り越えてきました。クサくてかなり恥ずかしいですが、再度言わせて下さい。先生は私の恩師です。

（主将：南部 裕）

以下、各部員より、渡部先生への御礼の気持ちを一言ずつ申し上げます。

☆渡部先生。先生とお会いしてから、すでに20年近くが過ぎました。先生に教わりましたサッカーを通じた異文化コミュニケーションはそこそこ成果を挙げ、私は4年間ほど、中南米のあちこちを旅して回りましたが、その土地や人々にある程度溶け込むことができました。ありがとうございます。先生のますますのご活躍とご健康をお祈りいたします。（岩井 祐治）

☆喘息持ちで激しいスポーツに自信のなかった私に、自分も喘息持ちだと仰り、先生は病院まで紹介して下さいました。その心遣いにどれだけ勇気づけられたことか。私は高校に入ってからサッカーを始めましたが、先生からはサッカーの面白さだけでなく、困難に立ち向かう強さも教りました。感謝しております。（岡田 知久）

☆志木高サッカー部での3年間、いちばん楽しくて誇らしくてあの頃に戻れたらもつと練習して強くなつて、あの日入院されていた渡部先生に予選通過の報告をしたかった…。そして当時お世話になったOBのみなさまにして戴いたように、その後もつと後輩たちのためになれたら…。土砂降りの雨上がり、水浸しのグラウンドに響いた最後のホイッスル。あの夏から17年が経った今

でもそう思います。（笠原 太郎）

☆渡部先生、長い間お疲れ様でした。私達の代は、マラドーナのメキシコW杯の年に先生と出会いました。あれから20年が経つのかと思うと時の流れの速さに驚愕するばかりですが、サッカーの素晴らしさ、楽しさを教えてくれた志木高サッカー部での3年間は何物にも代え難い大切な思い出です。サッカー場や教壇での先生のご指導、大変懐かしく思い出されます。どうかいつまでもお元気で。（金子 貞宏）

☆卒業以来お会いしていない渡部先生が退官されることで、長い年月が経ったんだと驚きました。私たちの代は現在35歳ですが記憶に残っているのはなぜか変なことばかりです。筋トレや一六四四のダッシュがキツくて手を抜いたこと、同級生仲間で飲酒して先生に怒られたこと。今となつては懐かしい思い出です。ご退官おめでとうございます。改めて大変お世話になりました。（川村 朋久）

☆渡部先生へ。長い間大変お疲れ様でした。志木高サッカー部の一員として先生の指導を受けることができたことにとても感謝しています。あの時みんなで悔しい気持ちや嬉しい気持ちを共

有できたことが、あれから20年を過ぎようとしている今、そして、今後の人生においても、糧になつていくものと確信しています。本当にありがとうございます。（小谷 淳治）

☆先生が退官されるとお聞きし、久方振りに思い返したサッカー部時代ですが、遠い様で、ついこの間の様で…。でも、高校入学から数えてみれば、赤ん坊が成人を迎える程の年月なんですね。この間、どれ程成長することが出来たのかは？？？ ですが、練習中に先生が大きな声で仰っていた「Look up!」は今も教えられることが多い言葉です。出来ることなら、もう一度あの頃に戻りたくなつて来ました（今度はケガなしで！）ご退官、本当におめでとうございます。（柴田 剛）

☆渡部先生、御退官おめでとうございます。「世良はパワーとスピードだけ」と頭を使うよう何度も御指導頂戴致しましたのに、未だに無駄に力を注いでは反省する毎日です。先生の当時からどこか達観された感のお話の真意に、日々の生活の中で気付かされることがあります。先生と御家族の御健康を心よりお祈り申し上げます。（世良 州）

☆あまりの成績の悪さに先生が私の両親にサッカーばかりやらせたご自分のせいだと謝られた

事を聞いた際には初めて本気で勉強しようと思ひ泣きました。学生寮に同期メンバー全員泊めた際には横並びで愛の鞭を頂戴しました。先生は常に我々に全身でぶつかって下さいました。それがどんなに難しいことか大人になった現在やっと知りました。本当に長きに亘りお疲れ様でした。我々皆がその伝承者です。（富原 大雅）

☆渡部先生、ご退官おめでとうございます。渡部先生が入学時の担任だったこともあり、何か運命のようなものを感じて高校生活を始めたことを思い出します。痩せていたために「ツル！」と呼ばれていたこと、先生の細かい動きを真似するのが大変だったこと、「頭を使う！」と言われてもなかなか出来なかったこと、なども今となつては懐かしい思い出です。（野田 清史）

☆入部当初、サッカーの本質を理解していなかった私に、技術と体力のみならず「考えること」と、そして「仲間を信頼すること」の重要性を教えて下さったのが渡部先生でした。「サッカーとは、子供を大人にし大人を紳士にするスポーツである。」先生から教えて頂いたこの言葉の重みを年月を重ねるにつれ痛感するとともに、サッカーを通じて人間として大切な多くの事柄を学ばせて頂いたことを大変感謝しております。（福嶋 潤也）

『感謝』

平成2年3月卒

多田 憲一

今回の原稿を書くにあたり、志木高サッカー部での三年間をじっくり振り返ってみました。色々なことが思い出されるのですが、改めて感じたことは「非常に恵まれた環境でサッカーをさせてもらっていた」ということでした。その代表例として以下の三つを挙げたいと思いますが、これらが整った環境でサッカーができたことはとても幸せなことであり、

志木高サッカー部には本当に「感謝」です。

一つ目はグラウンドです。ラグビー場、野球場、サッカー場、陸上トラックが別々にある高校はほとんどないと思います。野球のマウンドを気にせずプレーできる、雨上がり後でグラウンド使用できなくても陸上トラック内の芝生で練習できるなど、本当に恵まれていたと思います。

二つ目は素晴らしい指導者です。渡部先生をはじめ、指導力に長けた監督、コーチから数多くのことを学びました。特にサッカーにおける「賢さ」を学べたことは我々のサッカー人生の大きな財産です。

少し個人的な話になりますが、自分にとってはこの三年間で学んだことが、その後のサッカー人生の大きな武器になります。志木高を卒業後、大学の体育会サッカー部に入部しますが、幸いにして一年生からレギュラーの座を掴むことができました。周囲には暁星や清水東など、サッカーの名門校出身者もあり、正直、自分がそのような人たちに混じって試合に出られるとは思っていませんでしたが、この時に武器になったのが、志木高で学んできた「賢さ」でした。ここでいう「賢さ」とは言い換えるとポジションニングです。ポジションニングは、良い場所の先取りです。ポジションが良ければ多くの時間を能動的にプレーすることができ、技術や体力が勝っている相手とも十分戦うことができます。志木高三年間での、小人数対人練習（1対1、2対2、3対2など）を通じた徹底指導により、この「賢さ」を身に付けることができました。

三つ目は、現役とOBのつながりの深さです。我々の現役当時は野火止キッカーズの活動が盛んで（確か県の2部リーグに所属していたと記憶しています）、数多くのOBの方がグラウンドにお見えになり、我々の練習相手をしてくださいました。やはり格上の相手と練習することが上達

への近道ですので、とてもありがたいことだと思います。また、恒例の初蹴りも、大先輩から卒業したばかりの若手OBまで毎年大勢が集まり、つながりの深さを感じます。

このように、我々の現役時代は非常に恵まれた環境でサッカーをさせていただきました。

今後の現役世代にも、このような環境を提供し続けることが、我々OBの志木高サッカー部に対する恩返しであると考えます。一人一人では実行できることに限界がありますので、OB会組織を通じて志木高サッカー部の益々の発展に協力していきたいと思えます。

最後に、今までお世話になった皆様、本当にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

『渡部先生との思い出』

平成3年3月卒

小林英誠

私が渡部先生と始めてお会いしたのは、志木校入学間もない、昭和63年4月だと思います。中学時代はサッカーなど体育の授業でしかやったことのない私が、なぜか高校に行ったらサッカーをやるかと決めておりました。その理由は、今ではもう忘れてしまいましたが（もしかしたら、サッカーをやるかと女性にもてるという思い込みが当時はあったのかもしれませんが…）その思いが、私と先生との接点を作ってくれました。仮入部の期間に渡部先生がグラウンドにいらつしやり、元気良く声をかけられたのが最初の出会いだったと思います。

サッカー部時代の私の活動を今になって振り返ると、決して褒められたものではなかったと思いますが、渡部先生・高見沢監督・諸先輩の方々がご指導くださった当事の志木校サッカー部において、私は色々な事を学ばせていただきました。これは、サッカーの技術や戦術といったこと

だけでなく、人間として・大人として生きていくために必要なものを学び、それが今の私の人生において大きな財産になつていいると思ひます。高校入学当時はかなり幼稚で子供であつた自分が、今現在は一児の父親としていつぱしに生活しているのも、当時の人間的な成長によるところが大きく、先生には大変感謝しております。お忙しいこともあり、日々の練習に先生が顔を出されることはあまりありませんでしたが、試合が近づくと必ず指導にいらつしやり、いつも元氣な声で力強くご指導いただいたことを覚えております。残念ながら我々の戦績は、夏の予選リーグ突破はなりませんでしたが、私にとつては充実した日々でありました。

高校を卒業後も、正月の初蹴りに参加するたびに、先生にお会いしておりましたが、毎年恒例のように力強い握手で出迎えてください、そのたびに、非常に懐かしく感じたものです。最近、正月に親元を訪ねるといった行事の関係で、初蹴りに参加できない年が続いておりますが、そのうち、子供をつれて参加したいと思ひます。不思議なもので、高校・大学在学中には、先生とのサッカー部時代を思ひ出すこともそれほどなかつたように記憶しておりますが、年をとつたのか、社会人になると、心のふるさとのような場所に思ひてきます。それだけあの当時は、充実した楽しい日々を過ごしていたのでしようし、自己形成の場でもあつたのだと思ひます。

最近の出来事で印象深かつたのは、引越しのお知らせを先生にお送りしたときのことです。一昨年に初めての子供が生まれ、それを期に引越しをしたため、子供の写真入りでお送りした普通

の「引越しました」はがきなのですが、驚いたことに、先生からすぐにお返事を頂戴いたしました。一児の父親になったことをお喜びいただき、また、激励の言葉を頂戴し、「やはり先生は、いつまでも我々の先生なんだ」と非常にうれしかったことを覚えております。裏返せば、僕らはいつまでも先生の生徒なのでしようが、特に先生に喜んでいただくようなことを、今までした記憶がありません（申し訳ございません）。ご退任にあたり、せめて先生にお礼の言葉を言わせていただきたいと思います。

「先生、お疲れ様でした。今までありがとうございます。それとともに、これからよろしくお願いいたします。」



『志木高サッカー部の想い出』

平成4年3月卒
野中義政

グラウンドを見てまず最初に感じたことは、その広さです。中学までサッカーをやっけてはいましたが、高校ではまだ何をやるか決めかねていたところ、入学式の日、桜の木の向こうの広大なグラウンドでサッカー部が活動しているのを見て、即入部を決めた気持ちを今でも覚えております。その素晴らしい環境の中でなかなか個性的なメンバーが集まり練習を重ねましたが、私たちの代は各大会で目立った活躍はできませんでした。しかし、志木高サッカー部以外では得られない多くの経験を積むことが出来ました。

何よりも貴重だと感じるのは、在学生、卒業生が集まる初蹴り会があることです。皆さんも同様に感じているとは思いますが、諸先輩方をはじめ、家族も合わせてサッカーを中心にした場が毎年あるということは本当に貴重で素晴らしいことだと思います。平成3年卒業組は卒業当初は集合率が良かったのですが、だんだん参加人数が減っているので出来る限り参加していきたいと思っております。

また、現役チームのコーチに卒業生が就くというのも一体感を育む一因になっているのではないでしょうか。私たちの現役時代にも多数のコーチに参加頂き、プレー面だけではなく時にはリラックスさせて頂きながら精神面でも鍛えて頂いたことをとても有り難く感じております。

大きなイベントとしては、やはり早慶サッカー定期戦、西が丘サッカー場や国立競技場の芝を踏んだ時にはとても感激しました。が、3年時には国立の雰囲気になじめず、早慶相手にコートを支配され4点取られたことを覚えております。そして、その後の大学戦で健闘する先輩方を見てとても頼もしく感じました。あのような場でサッカーが出来るというのは、まさに他では得ることの出来ない貴重な経験です。

サッカーの内容は現在更に進化しており、十数年前とは戦術でも見違える程レベルが上がっていると思いますが、一貫して御指導にあたられてきた渡部先生におかれましても常に研究し、とても貴重で充実した御指導生活を送られたのだと思います。広いグラウンドいっぱいに響き渡る

ような先生の甲高い声が聞かれなくなるのは寂しいことですが、長い間の御指導生活本当にご苦
勞さまでした。サッカーによつて紳士になれたかどうかは分かりませんが、御指導のもと充実し
た高校生活を送れたことは自信を持つて言えます。私自身、三年生時にはマネージャーを務めま
した。その後も野火止OBチームなどサッカーを中心に様々な体験をすることができ、今に活き
ていると思います。とりとめのない想い出話になつてしまいましたが、最後に先生にはくれぐれ
もお身体に気をつけて頂き、毎年正月に元気な声を聞くことができるのを楽しみにしております。
本当に有難うございました。

『3Bの重要性』

平成5年3月卒

吉野 慶

渡部先生、長い間のご指導大変お疲れ様でした。私共の代は、最終的には私以外では木下、井筒、岡田、平野、細井、渡邊と合計7人とかなり少なくなり、先生の印象もあまりないかもしれませんが、私は先生のご指導やお言葉は今でもはつきりと覚えております。

何よりも先生のお言葉で印象に残っているのは、やはりサッカーで重要ことは「3B」、すなわち、Ball Control, Body Balance及びBrainの3つであり、特に3つ目のBrainが最も重要であるというお言葉です。先般の高校サッカー選手権では体力ではなく、この技術や戦術（頭）の重要性といったものが注目を浴びましたが、先生はもう15年以上も前からこのことを強く訴えられていたことを考えると改めて先生の指導力には感服いたしております。

そして、これはサッカーだけに限ったことではなく、仕事にも人生そのものにも当てはまるものであり何事も頭を使うことが重要であるということは常に意識しております。

先生のご指導にもかかわらず、私共の代は特に優秀な成績を残したわけではありませんが、それでも高校3年間サッカーに没頭できる環境を与えてくれた先生や監督コーチ、諸先輩方そして志木高には心から感謝しており、この間の経験が自分の人生の大切な財産となっています。

この度志木高を退職されるということですが、今後とも先生のご活躍を心から祈念しております。ありがとうございます。

『渡部真也語録』

平成6年3月卒

鈴木剛史

平成6年卒の「たけし」です。

渡部先生、お仕事を無事勤め上げられましたこと、そして、サッカー部のご指導お疲れ様でございました。なお、私事ではありますが、志木校卒業後も、コーチとして迎え入れて下さり、誠にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、今回この記念冊子を書くにあたり、志木校サッカー部や先生の思い出となると、あまりにも膨大すぎて、原稿用紙2000枚くらいになってしまう恐れがあるので、今でも私の脳裏に焼き付いて離れない、強烈な出来事を、先生の語録で手短にまとめたいと思います。最後まで宜しくお付き合いください。

渡部真也語録①

「1年G組渡辺ドーム君、至急職員室まで」（平成3年9月）

私が1年生の時、同期のW（現在弁護士として活躍中）が練習中、校内放送で突然先生に職員室に呼び出されました。

状況をよく分かっていない私たちは「渡辺ドームって？ 新しいあだ名？」くらいにしか考えていませんでした。

事の真相は、Wがグランドに戻ってきた時に判明しました。何と、Wが落とした財布を、偶然にも先生が拾い、中に青少年らしからぬ物が入っていないか確認してくれていたのです。案の定、財布には「明るい家族計画」が入っていました。没収はされませんでした。Wは「良かった。これで電車の中でいつAV女優に会っても大丈夫だ！」と、とても喜んでおりましたが、それを使うのはまだまだ先になるとは本人もこの時は分かっていなかったようです。

※注 本人の名誉の為、あえてイニシャルとさせて頂きました。

渡部真也語録②

「足の甲のトラップはこれだけ。これだけ出来れば日本代表に入れる。」（平成9年8月）

私が志木校コーチをしていた際、先生が高校生に教えた足の甲を使ったトラップの方法。足首

の微妙な変化でボールを足元・左右、自在にトラップできるというものです。実際、やってみると本当に簡単にでき、当時大学生だった自分も恥ずかしながら、目から鱗だった覚えがあります。先生が教えるサッカーは、本当にシンプルで分かりやすかったというのが印象に残っています。前述のトラップをマスターしても、日本代表にはなれませんでした。が、年齢30を過ぎ理想通りに走れなくなつた今、先生から教わつたたくさんのテクニックが役に立っております。

渡部真也語録③

「サッカーについていうのは、ここ（頭）でやるスポーツなんだ。」（いつでも）

この言葉を知っているから、私は今でもサッカーが出来るのかもしれない。毎年のように初蹴りに訪れる諸先輩方もそうなのではないでしょうか。たとえば、現役の頃のように身体が動かなくても、頭を使い、動きをイメージし考えることでサッカーは充分に楽しめるのです。それを教えてくれたのが、先生でした。今さらですが、この言葉を実感しています。

原稿が残り少なくなってきたので、この辺で筆を擱こうと思います。

最後に、渡部先生、私の現役時代は諸々の事情があり、先生はグラウンドに顔を出す機会があま

り多くありませんでした。ただ、グラウンドに来てくれた時、私たちは「今日はどんな練習がで
きるんだろう」といつも期待していました。

コーチ時代。夏、練習後、職員室で頂いたビールの味はまだ憶えています。必ず将来役に立つ
からと、つけていた練習メモは今でも大切にとつてあります。

コーチ時代も含めて最高の6年間でした。

本当にありがとうございました。

僕は、志木校サッカー部の一員であることを誇りに思います。



『志木高サッカー部で学んだ事』

平成6年3月卒

大久保 俊行

渡部先生、長い間、志木高サッカー部へのご指導ありがとうございます。ございました。心からお礼を申し上げます。

私は、志木高サッカー部で、高見沢監督のもと、多くのことを学ばせていただきました。当時、渡部先生とお話させていただくなかで、私が学んでいることのルーツは渡部先生にあると感じていました。

そのなかでも、「周囲への感謝」と「自分の頭で考えること」については、熱くご指導いただいたことを記憶しています。

これらの重要性については、私のその後の人生で何度も感じ

ています。

特に、社会人になってからは、自分の頭で考えて切り開いていかなければならない場面に何度も遭遇しました。そういった場面で、志木高サッカー部での思い出が私の自信の源となっています。

また、社会人になってサッカーを続けていくにあたって、相手、場所の確保、スケジュール調整など、全てを自らの手でしなければならないという現実には直面し、チームの運営に苦労しました。そんな時も、周囲に対する感謝の気持ちを失わなかったのも、なんとか今もサッカーを続けることができています。

現在では、私が社会に出て（まだ、たったの8年ですが）なんとかやってこれているのも、高校生という多感な時代に、「周囲への感謝」と「自分の頭で考えること」という、非常に大切なことを学ばせていただいたお陰だと思っています。本当に、ご指導ありがとうございました。



『渡部先生と志木高サッカー部の思い出』

平成8年3月卒

工藤雄介

渡部先生、長い間の教員生活、おつかれさまでございました。そしてその間、生徒として、また、サッカー部員としてご指導ご鞭撻を賜りましたことを、この場をお借りしまして、改めてして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私たち平成7年卒は、入学当初は20名程の大部帯でしたが、最終的には、自分にも他人にも厳しく、当たりはさらに厳しいキャプテンの山野を中心に、スピードと体力でサイドの要を務めた古橋、爆発的なキック力と冷静沈着なプレーで中盤を支えた橋本、ゴール前の切り返しからのシュートでチームを救つて

きた大野、FWからDFまで全てを卒がなくこなす地道な努力家の甲賀、ガタイを活かしたプレーで前線を支えた遊佐、右サイドでも神出鬼没の有光、怪我ばかりしていたGKの工藤の8名が引退試合まで残ったメンバーでした。

私たちの学年は、渡部先生だけでなく、松岡勝男先生や高見澤英雄監督や森田徹コーチのご指導も頂き、先輩や後輩にも恵まれ、それぞれが満足のいく高校サッカー生活を送ることができたと思っております。何よりも、最後の試合となった夏の県大会で惜敗した試合後、皆一様に悔しさはありましたが、それ以上にやるべきことはやってきたその結果ここまでこれた、という達成感と満足感を感じていたように記憶しています。その証拠に（?）、最終戦後に撮った写真では、皆すがすがしい顔をしています。

最後に、メンバーから渡部先生へのメッセージを記させていただきます。

★サッカー部で得たものは「気持ちの強さの大切さ」です。（山野明登）

★長い間、大変お疲れ様でした。復帰された後も時間を見つけては見学に来て頂き、プレーに關して色々とおアドバイスを頂いたの思い出です。お蔭様でその後もサッカーを続けており、4月よりUAEのドバイに赴任しておりますが、こちらでも色々な国の人とサッカーをしておりま

す。退職後も是非、充実したサッカー人生をお過ごし下さい。（古橋 宏紀）

★トベさん！ 長い間ご指導いただき、ありがとうございました。サッカー素人であつたボクが最後までがんばれたのはトベさん始め多くの方のサポートがあつたからだと思つてます。今思えば志木高サッカー部での三年間は体力、技術だけでなく精神力が一番鍛えられたような気がします。おかげでどんな環境でもやっていける自信になり、社会人になつてもとても役に立っているなと実感しています。これからもトベさんの体調維持に微力ながら貢献できればこの上ない喜びです。また初蹴りで会いましょう！（大野 洋平）

★渡部先生が学習院との練習試合にいらしたときにトラップをほめて下さったことは、今でも覚えています。（甲賀 浩明）

★「キーパー、元気にしているか？」とグラウンドでいつも声をかけて頂きありがとうございます。いました。片隅で寂しく練習していることが多かったので、渡部先生の一声がいつも励みになっていました。「少年を青年に、大人を紳士に……」その心を先生から学びましたが、未だに大人になれずにあります。ご勇退後も益々のご活躍とご健康を祈念申し上げます。（工藤 雄介）

渡部真也先生、本当におつかれさまでした。また初蹴り等でお目にかかれるのを楽しみにしております。ありがとうございます。

『私と渡部先生』

平成9年3月卒

金井 茂樹

私が渡部先生と接した中で何かを述べるには余りにおそれ多いので、幾つか印象に残っている場面についてふれてみたい。

まず初めて渡部先生にお目に掛かったのは高校入学後の最初の保健体育の授業と記憶している。授業内容については全く記憶にないが、渡部先生が雑談をするたびに、昔のオリンピックサッカーチームの当時のエピソードが紹介され、それとなく聞いていた。しかしその話があまりにも細部にわたり、先生自身が当事者でなくては知り得ない内容が明らかに含まれており、不思議な感覚を持っていた。その後の部活で先輩らより渡部先生がメンバーの一員だったことを聞かされ、本当に驚いたものだった。一方顧問の先生が偉大なサッカー選手であった事に大変勇気付けられ

たものだつた。

これは私のみならず、皆が同じことを思つたことだろう。

そんな渡部先生だが、練習に顔を出されることは稀なことで、我々にとつてもその存在は少々大袈裟な表現ではあるが、神格化していった。

当時の高見澤監督は我々にとつての唯一絶対の指導者であり、最大の敬意をもつて接していたが、その高見澤監督の渡部先生に対する姿を見ていたので、渡部先生の偉大さは高校生の我々でも容易に理解する事が出来た。

ところで、渡部先生が偉大なサッカー選手であつたことを技術面から誰も気が付く瞬間があつた。

部活の最中に渡部先生のところボールが飛んでいつてしまう時の事だ。

渡部先生は実に多彩なキックで我々に返してくれる。やはり今思い出しても、あの白いシューズから繰り出される綺麗な回転の掛かつた右足のアウトサイドキックは芸術的だった。キックもそうだが、色々貪欲に教えてもらおうとしてもよかつたのではないかと、若干後悔している。

ただし、記憶に残るアドバイスがある。私が高校二年生の春の県大会出場後、左足首靭帯損傷のリハビリにつき、夏までの期間、別メニューでの調整をしていた時の事だ。当時の自分にとって

は靱帯損傷の治療が遅々として進まず、試合に出場出来ない焦燥感をグランドのトラックでのラ
ンニングや簡単なボールタッチでまぎらわせていた。今から考えてみれば大した事ではなかった
のだが、当時の自分としてみれば、リハビリで別メニューを黙々と週5日やり続ける事は孤独だっ
た。渡部先生が足を運んでくれるたびに、声を掛けてくださり、「怪我の時のトレーニングがの
ちに良い結果を生むことが多い。たとえば、昔〇〇オリンピックで得点を決めた△△も、怪我で
ボールが蹴られなかった時に黙々と××のトレーニングを繰り返し、その後……云々」と。どうい
うわけだか、当時の私はその言葉を聞き、「怪我の時は筋トレ」と思い込み、ラグビー部並みの
足の太さを手に入れる事になった。結果、ディフェンスの1対1にこれまたなぜか異様なほど強
くなり、完全に自分の強固な武器を取得した。これは渡部先生と私とのやり取りの記憶で最も強
く残る出来事になっている。

また当時、私は髪の毛の色が金に近い茶色をしていた。髪の毛を見るたびに、「元気がいい髪
してるねえ」と冷やかされていたが、言葉の一つ一つが本当に温かく、色々な事を受け入れてく
ださる心の広さも感じていたものだ。

一方そんな渡部先生から我々が注意を受けた中で印象的だった事もあった。

国学院久我山との練習試合を先方で行う日、試合時間を数時間間違えた為、国学院久我山に着
いたのち、一旦志木に戻って練習し、再度久我山まで戻って試合をするという経験があった。往

復の電車の時間等を考慮すれば、僅か1時間足らずしか練習時間はない事から、志木まで戻るの
は大変に苦痛だったが、志木でグラウンドに待ち受けていた渡部先生から、我々に対して「戻つて
くるのは当たり前のことだ」と珍しく一喝された事を覚えている。不思議と皆納得して、練習を
開始したものだつた。

そしてどうしても私個人は我々最後の夏の埼玉予選が印象に残る。埼玉栄とのPK戦で5番手
のキッカーの私はずして負けたのだが、涙を流す私は渡部先生から励まされ握手をした。その
時何を仰つて頂いたか興奮状態だったこともあり忘れてしまったが、大変握手の力が強かつた事
を覚えている。確かに現役最後の渡部先生との思い出だ。

ここには書ききれないほど、渡部先生の言葉や思い出があるが、OBとなり、初蹴りなどでグ
ランドに行くこともしばしばあるが、今でもいつもなぜかとても力強い握手、場合によつては力
が強過ぎて痛いほどだが、温かく迎えて頂いている。個人的には現役最後の握手を思い出すこと
が出来るので、人一倍感慨深いかもしれない。

私みたいな若造にはお話できる時間などは僅か数秒程度だが、これからも年に一度、現役時代
から続く痛い程の力強い握手をする機会があることを願つてやまない。

また最後に末筆だが、我々の代の部員を代表して、渡部先生への感謝の念と長年の教員生活に

対して本当に心より敬服し、お祝い申し上げるとともに、今後の益々の有意義な人生を送っていただく事を確信し、祈念したい。



『あきらめない心とチームワーク』

平成10年3月卒

岡田 誠司

渡部先生、この度は長年お仕事を無事勤めあげられましたことをお祝い申しあげます。また、サッカー部のご指導お疲れ様でございました。心より御礼申し上げます。

今回、この記念冊子への原稿を記述するに当たり、私達の代では中井さんが監督を務めて下さった最初の年ということもあり、渡部先生にも平日・休日問わず、練習のご指導を頻繁に頂いたので、渡部先生の私達に対するアドバイスを中心として記述したいと思います。

現在改めて考えて見ますと、渡部先生のご指導の中で、私に

とって最も印象的であつたことは先生の私達に対するアドバイスの仕方であつたと思います。

具体的にどのような点で印象的であつたかですが、渡部先生のアドバイスはサッカーの戦術に関するアドバイスよりも精神的なアドバイスにより重点がおかれていた点が印象的でした。

渡部先生は、日々の練習から試合に至るまで、一貫して私達が前向きでプレーできるようにアドバイスを常にして頂き、同時にチームワークの重要性もご指導頂きました。また、戦術に関するアドバイスでも、私達が簡単に理解できるよう、なるべく簡単な言葉で教えて下さいました。

当時の私達は、そのような渡部先生のご指導から「自分達は絶対にできる」という自信を自然と培うことができました。

そのようにして培われた自信が結果となって現れたのは、インターハイ予選でした。

インターハイ予選の初戦である、西部地区1回戦の相手は、川越南高校でした。試合内容は今でもはつきりと覚えておりますが、シュートを10対1位の比率で打たれる程の劣勢を強いられた試合でした。しかし、あの試合では私はなぜか全く負ける気がしませんでした。試合も相手のシュートを間一髪ところで防ぎきり、結局0対0で試合を終え、PK戦での決着となりました。PK戦では相手が最初の3人が全員外す、という非常に珍しいこともあり、見事勝利することができました。

当時、勝利したときはただただ嬉しかったのですが、現在になり振り返ると、渡部先生のア

ドバイスで培われた、「自分達は絶対にできる」という自信が自然と体现した結果であつたと思います。チーム全員の、逆境でも決してあきらめない気持ち、対戦相手には無言の圧力となつていたのだと思います。

その大会では、1回戦での勝利で勢いに乗る事ができ、当時の私達にとつては大きな成果であつた県大会出場を果たすことができました。

また当時の渡部先生のご指導は、サッカー部でお世話になつていた頃だけではなく、現在の私にとつても、とても役立っている事を日々実感しております。社会人生活も、もうじき5年目を迎えますが、あまり長くない社会人生活においてもこれまで様々な困難に直面してきました。そのようなときには渡部先生のご指導のように「自分ならば絶対にできる」ということを自分に言い聞かし、また絶対にあきらめずに困難に立ち向かうことにより乗り越えてきました。

また、私の勤務先のワークスタイルは「プロジェクト」単位であり、プロジェクト毎に違ったメンバーで仕事をしていかななくてはならないのですが、そこで当然重要になってくるのは「チームワーク」です。

チームメンバーで一丸となつて勝利を目指すサッカーと、チームメンバーが一つとなつてビジネス上のゴールに向かつて力を結集する仕事とでは、「チームワーク」という点では実質的には差異がほとんどありません。そして、「チームワーク」を発揮した場合のパワーの威力は、渡部

先生のご指導から学ばせて頂いたお陰で、現在の日々の仕事にも生かせることができています。

最後となりますが、サッカーの面では特に顕著な成績は残せませんでした。志木高サッカー部で過ごした3年間で様々な事を学ぶことができ、とても有意義な3年間でした。渡部先生、改めて本当にありがとうございます。そして、これからも初蹴り等でお会いできることを楽しみにしております。

『渡部先生という存在』

平成11年3月卒
鈴木 豊

高校入学から数えるとはや10年の歳月が流れ、私と渡部先生とのお付き合いも同じ歳月を重ねているわけですが、いま改めて当時のことを思い出す作業は毎年初蹴り等でお会いしながら意外に難しいものでした。細かい点に正確性を欠くところがあるかもしれませんが許して頂ければと思います。

当時を振り返ると、私の代がメインとなった頃は、志木高サッカー部OBの清水コーチと中井監督、そして渡部先生という体制で2年目を迎え、日々の練習は清水コーチに来て頂いて指導を受けていることが多かったときでした。マネージャーとしての私は渡辺キャプテン、会計の池田君と共に「主張が多い」部員と先生との橋渡し役をすることになり、よく休み時間中に校内放送で呼び出されたものです。先生は体調が万全とは言えず指示は職員室からということが多かった

ので、部員との認識の差がときに生まれることもあり、その調整に奔走していたことを思い出します。

とはいえそうした状況においても、渡部先生は部員の特徴を捉えるのが非常に早く、常に部員の長所短所をよく把握されていたように思います。3年生はもちろん、部員数の多かった1年生まで、グラウンドに毎日足を運ばれるわけではなく、ましてや授業で接する機会も多いわけではないのにもかかわらず、一人一人をよく見ていらつしやつた。そのような先生だったので、渡部先生がグラウンドに足を運ばれることを皆が望んでいたように思いますし、先生に冗談めかされながら声を掛けてもらうのを内心嬉しく思っていたメンバーはきつと多かったのではないかと思います。少なくとも私はその一人でした。

人の心と特徴を掴むうまさといい、往年の厳しさと愛嬌が同居したその独特なお人柄に表される渡部先生はやはり志木高サッカー部の支柱であったと思います。

加えて、先生の人脈の広さに驚いたことに、高校3年の夏に初めて行つた遠野遠征がありました。渡部先生のお知り合いという縁で、全国区で有名な遠野高校との練習試合をメインに1週間ほど岩手県に遠征合宿を行いました。遠野高校との試合の結果は残念ながらここに記すほどのものではないので省略しますが、部の結束と全国レベルの相手と試合することができたことは非常に大きな経験となったと思います。いまだに謎に包まれている(?)先生のご人脈の深さの片鱗

を垣間見たイベントでした。

また個人的に振り返ると、マネージャーとして接することの多かった私は渡部先生からマネージングについての多くのことを教わることが出来たと思います。時に激しく、時に愛嬌たっぷりな先生は非常にシンプルな考え方をお持ちの方で、そのような人間的な魅力の溢れる先生からマネージャーとして学び経験させてもらったことは、今の自分の大事な抛り所となっている気がします。

私個人としても、そして多くの部員が思っているとおり、渡部先生は「お父さん」と「おじいさん」の間の親しみのありかつ厳格な存在だったといってもいいかと思います。そのような先生に指導を頂いた日々と高校サッカー部時代は非常に充実していたように思い出されます。

今後も陰から志本高サッカー部を支えて頂き、OBの抛り所として厳しくも愛嬌たっぷりな声をかけて頂ければと思っております。

いつも会う度に交わされる力強い握手をいつまでも楽しみにしております。



サッカー部

『サッカーの醍醐味 3人目の動き』

平成11年3月卒

山内 学

私がサッカー部に在籍しておりました時期は、ちょうど渡部先生が体調を崩されていた時期と重なり、直接ボールを使つて、というより練習を見守り、動き方、ポジショニングと言つた点をご指導頂いたのが印象に残っております。その中でも特に時間をかけてご指導頂き、印象深く残っておりますのが『3人目の動き』です。世界のトップレベルの代表やリーグのサッカーは、今の日本代表、Jリーグよりもチームとしての運動性が高く、見ていて楽しいサッカーをしています。チームとしての運動性が高い理由、それはボール保持者とその受け手だけで

なく、『3人目』がスペースに走ったり、ポジショニングを修正したり、一步先のプレーをイメージしながらサッカーをしているためです。記念冊子の作成にあたり、私個人の思い出に近くはありますが、平成11年度を代表して『3人目の動き』についての思い出を寄稿したいと思います。

冒頭にもありますが、私がサッカー部に在籍していた頃、渡部先生は体調を崩されており、休日には中井監督が指導に来て下さっていたものの、平日の練習には指導者の方はおられませんでした。そのため、平日は私やマネージャーの奥野、副主将の佐藤、上條で練習メニューを考えながら活動していましたが、メニューを自分達で考えると、行き着くところはシュート練習やゲーム。同じような練習を繰り返す日々が続く中、渡部先生がグラウンドに來られた際には、今までとは違ったメニューが組まれ、その中の一つに『3人目の動き』の練習がありました。練習内容としては、自分がボール保持者に対して自分以外の〇〇にパスするよう「〇〇に！」と声を掛け（時には身振り手振りを使って）、自分はその〇〇からボールを受ける、というもの。自分とボール保持者の間に相手がいたときに如何にボールを受けるか、ということを想定した練習で、至ってシンプルな内容でしたが、現役当時、しっかりと練習の意図や目的を理解していなかったせいかな、試合で『3人目の動き』を実践するには至りませんでした。

試合で実践できなかったこの練習が、今でも志木高のサッカー部での思い出として深く残っているのは、現役を離れた後にこの練習の意味をはっきりと理解し、実践できたことにあります。

高校を卒業し、現役時代よりも体力が衰え、限られた体力の中で如何にしたら楽にプレーできるか、と考えていたときに、『3人目』を絡ませることで相手より一步先のプレーを考えながら、プレーできるようになるのだな。また、そのためにダイレクトプレーが増え、チームとしての連動性が高まり、相手のプレッシャーをかわすことができるのだな。』と。現役時代よりも年を取り、筋力も体力も落ち、個人の力では状況が打開できなくなった状態が頭を使わせたのだと思います。(余談ですが、現役当時、『○○に!』と指示を出したことがなかったため、その指示を出すことに妙な恥ずかしさがありました。他の部員も慣れない声の出し方に戸惑っていた記憶がまだ鮮明に残っております。しかし、体力が衰えると声を出すことへの恥ずかしさも楽にプレーすることへの魅力に負け、感じるようになりました。この辺りも年の功かもしれないですね。)

私は大学3年の時にコーチの要請を受け、1年間志木高のコーチも務めさせて頂きましたが、その背景にもこの『3人目の動き』があります。『3人目の動き』の意味を理解したときには既に現役を引退していた私は、「現役当時にこれを理解できていたら、もつとサッカーが楽しめたのに」という思いを持っておりました。そんな思いを抱えている中、初蹴りで久々に志木高のグラウンドを訪れた際に、コーチの依頼を受けました。コーチがいなかった当時の現役世代が自身自身の現役時代と重なり、チームとしてサッカーをすることの楽しみである『3人目の動き』を教えられたらと思い、コーチを快諾しました。

社会人になった現在も会社のサッカー部に所属し、週末にはボールを追いかけております。まだまだ現役バリバリ！ と言いたいところですが、体力は落ちていく一方で、チームメイト含め1試合走りきるのが精一杯という情けない状態です。しかし、そんなチーム状態でも楽しいサッカーができるよう、渡部先生からご指導頂いた『3人目の動き』を忘れずにプレーしております。最後になりましたが、渡部先生、長い教師生活どうもお疲れ様でした。これからはお体を大切に第二の人生を楽しんで下さい。初蹴りの機会にでもまた志木高のグラウンドでお会いできるのを楽しみにしております。

『サッカーと高校生活』

平成13年3月卒

廣瀬 大輔



平成13年度3月卒業の廣瀬大輔です。この代の主将を務めさせていた দিয়ে おります。

このような形で、渡部先生と自分の関係を振り返ることに少々照れ臭さを感じておりますが、改めて感謝の言葉を述べたいと思います。渡部先生には、高校3年間本当にお世話になりました。思い返せば、私が先生と初めて出会ったのは入学して間もない4月の体験入部に参加した時でした。

高校に入学したら、必ずサッカーをやる 私は、はじめから決めていました。ところが練習に参加し実際に先輩方のプレー

を目の当りにしてそのスピード、ボディコントロール、正確なキックにボールコントロール、全てが中学のサッカーとは桁違いで、高校でサッカーをやっているのか、大きな不安に包まれていたのを、今でもはつきりと覚えています。

そんな不安の中、渡部先生がいつも口を酸っぱくしておっしゃっていた言葉がとても印象的でした。

「サッカーは、馬鹿な奴はいくらやつても上手くはならない。サッカーは頭でやるスポーツなんだよ。」

その言葉が、私のサッカー観の礎になっているといっても過言ではありません。スピードや当たりの強さだけが全てじゃない。どのように動いて、どのように相手と競るか。高校時代の先生の教えの通り、私は常に頭を使ったサッカーを意識するようになりました。そうやって私は、サッカーにのめり込んでいきました。

毎年初蹴り会には、多くのOBの方々が集まってきます。こうやって自分が慶応義塾志木高校を卒業した後も、先生とOB、後輩と毎年集まれることをたいへんうれしく思います。これも全ては、私をはじめOBの方々が先生を慕ったことだと思っています。

高校生活の3年間、先生にはたいへんお世話になりました。高校生活は私の人生の中でもっとも充実していた日々だと胸を張って言えます。

先生の益々のご活躍を期待すると共に、毎年初蹴りでお会いできることを楽しみにしています。

『充実』

平成13年3月卒

岡野 友亮

兄が2つ上の学年におり、サッカー部に所属していたこともあり、志木高に入学してすぐにサッカー部の練習に参加し、そこで渡部先生と出会いました。以後、マネージャーを務めたこともあり、卒業までの3年間、渡部先生には大変お世話になりました。

今振り返ってみると、私の高校生活は、サッカー部での活動を中心として動いていたといえます。今でも記憶をたどれば、1年の夏に行った東北への合宿をはじめ、練習や試合の個々の場面が頭の中に映像として鮮明に蘇ってきます。

自分の得点した場面、満足の行くパスを出すことが出来た場面という記憶の映像が必然的に多くなり、その中でも特に、2年の秋の新人戦、大井高校との試合で0―3と負けているときに、直接FKを決めることが出来たこと、結局、その試合は敗れてしまいましたが、この場面は一生

忘れることのない大切な思い出です。

このように、今でも鮮明に映像として蘇ってくるというのは、サッカー部での活動がとても充実していた証拠であるといえると思います。充実させることの出来た最大の要因は、渡部先生の気配りやちよつとした一言であつたと思います。練習や試合を観に来てくださったりした際の一言はもちろんのこと、様々な面で部活動に打ち込める環境づくりをしてくださっていたと思います。

3年間のサッカー部生活で得られたこと、学んだことはたくさんあり、それはその後の大学でのサークル活動に活かすことができ、また、今後の社会人としての生活にも活かしていけるのではないかと考えています。

最後に、選手権予選の抽選会に渡部先生と共に参加した際に、埼玉県サッカー協会会長のはじめの挨拶で、「今日は慶應志木高校の渡部先生もお見えになつており……」と話がはじまり、驚いたこと、今でもはつきりと覚えています。

高校生活3年間は本当にお世話になりました。これから宜しくお願いいたします。

『私の人生の恩師へ』

平成14年3月卒
情野 誠人



渡部先生、ご卒業おめでとうございます。

私にとって、間違いなく人生最高の3年間であつた慶應志木高校を卒業して、早いもので4年が経つのですね。今考えてみても志木での3年間は決して忘れることのできない素晴らしい時間でした。それも渡部先生指導の下、サッカー部で活動ができたからです。

今だから言えますが、私は入学当初、サッカー部への入部はあまり積極的ではありませんでした。しかし入部当日の「せいちゃん、良い上がりしてたよ」という先生の一言が本当に励み

になりました。その言葉から私のサイドからの攻撃に自身を持つようになり、サッカーが大好きになりました。4月から私はサッカーの楽しさを伝えたいとテレビ局で働きます。先生のあの一言がなければこの選択肢はありませんでした。私の人生の恩師は間違いなく先生です。ありがとうございます。

『渡部先生へ』

平成14年3月卒
文堂友寛



まずは、高校三年間のご指導、ご支援本当にありがとうございます。ございました。渡部先生はみんなから親しみの意味を込めて「トベ先生」と呼ばれ、本当に誰からも慕われていた存在です。渡部先生は僕たちが高校1年の終わり頃から体調を崩されてしまい、練習にもなかなかお越しいただけない時期もありましたが、そんな中でも頻繁に練習、そして試合を観てくださって感謝の気持ちで一杯です。渡部先生はいつも僕らの体調管理に気を配ってくださいましたし、指導面では、戦術、技術的なことはもちろんですがメンタル面の重要性、チームとしてまとまる

ことの重要性、その他にも表現できないくらい本当にたくさんのご指導いただきました。試合後のミーティングでは、負けて下を向いてしまっている自分達に檄を飛ばして元気付けてもくございました。

志木高校サッカー部は、「縦」の関係が密につながっていることが強みであると感じています。大学進学後も現役高校生の合宿のコーチや、練習試合、さらには審判と、自分達が現役のときに先輩方にやっていただいた事を今度は自分達がやろうという気持ちで自然に芽生えてきます。その「縦」の関係の中心には監督はもちろんですが渡部先生が存在がいつもあります。毎年恒例となっている1月2日に行われる初蹴りでは、先輩後輩みんなが渡部先生を慕っている光景を見て改めてそう思ったりもしました。初蹴りだけでなく志木高サッカー部の行事が行われる度にその長い歴史と伝統に驚かされ、渡部先生そして多くの先輩方が守ってきたその伝統を、自分達も後輩に伝えていかなければならないと感じています。

また、渡部先生の退任を記念して行われたドイツ学園との親善試合では埼玉スタジアム二〇〇二で貴重な経験をさせていただきありがとうございました。渡部先生のご人脈の凄さを知った一日でもありました。この日はお世話になった渡部先生に会おうと、多くの先輩方が子供を連れてスタジアムを訪れてきていました。渡部先生の志木高校サッカー部における長い間のご指導があつてこそその素晴らしい一日だったと思います。

最後に、改めまして、いままで本当にお世話になりました。どうもありがとうございました。

『3年間の思い出』

平成15年3月卒
新見 孝之

高校では、サッカー中心の日々を送りたいと思っていたので、入学式の次の日から部活の見学に行きました。本来であれば、仮入部期間というのは入学式から1、2週間後から行われるものでした。そうであるにもかかわらず見学をしていた自分に対して、当時のキャプテンであった廣瀬さんが

「運動をできる格好をしてくれば、明日から練習に参加してもいいよ。」

と優しく声をかけてくれました。そして、入学して3日後くらいから練習に参加させてもらいました。

その後、仮入部期間も終わり正式に入部を認められました。当時の1年生は約20人くらいでした。入学当初は知り合いなど誰もいませんでしたが、部活に入ったことで私生活でも部活で知り

合った友達と一緒にいることが多くなりました。

また、自分たちの代は多くの指導者に恵まれていたと思います。渡部先生には、3年間を通して指導していただきました。初蹴り会などでは諸先輩方から

「自分たちの頃は、渡部先生から鬼のような指導を受けていた。」

との噂を聞いていました。自分たちの代では渡部先生の体調などもあり、グラウンドで指導を受けることは少なかったです。しかし、渡部先生がグラウンドに来てくださったときは練習のムードが一気に引き締まるような感じでした。

入部してから2年生の冬まで中井監督の下、練習に励みました。中村さんには、2年生の春頃からコーチとして、2年生の冬からは監督として引退するまでお世話になりました。平日は自分たちでメニューを考えて練習し、土日に中井監督や中村さんの指導を受けていました。休日にもかかわらず遠方から練習に来てくださった中井監督と中村さんには本当に感謝しています。3年生の春からは非常勤講師として志木校にいらしていた川島さんにも指導していただきました。

一つ上の先輩たちが引退してからは、マネージャーとして部活の運営にかかりました。自分たちが最高学年として部活を引っ張って行く立場になり、責任も以前に増して大きくなりました。マネージャー業の仕事も、部費の管理や練習試合の申し込み、道具の管理など多くの仕事があり

ました。その中でも、個性的なメンバーをまとめるのは非常に大変でしたが、とても貴重な経験ができたと思っています。

毎年、夏休みには波崎で合宿を行っていました。真夏の暑い日差しの中での練習は非常に辛く、厳しいものでしたが1番の思い出となっています。

また、初蹴り会は志木校サッカー部の歴史を最も感じることでできる機会でした。卒業してからは、同級生や先輩、後輩と一緒にボールを蹴る機会はほとんどありません。しかし、初蹴り会ではみんなとサッカーをできるので毎年楽しみにしています。

最後に、現役時代を含めOBの方々にはお世話になりました。そして、これほどまでに素晴らしい志木校サッカー部の歴史を作ってこられた渡部先生に心より感謝したいと思います。志木校サッカー部で3年間、渡部先生とともにサッカーをすることができたことを誇りに思います。ありがとうございました。

